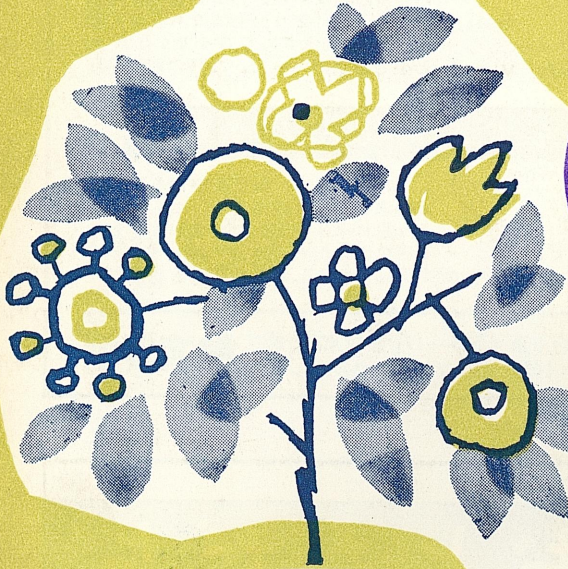


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第六十一卷

第六号



6

日本幼稚園協会

10

# 幼児のための 紙芝居です



●'62年度幼児テキスト紙芝居全集第3回配本中

## おなかでチクチク

いつも胸に大きな時計をぶらさげている時計屋がいた。ある日、釣りに出かけたら、「どうせ釣るなら、ぼくたちをたべる、大ざめを釣ってください」と小さな魚がいった。〔時の記念日〕

●ミュージカル  
レコード付 ¥ 420

## てんてん てんとうむし

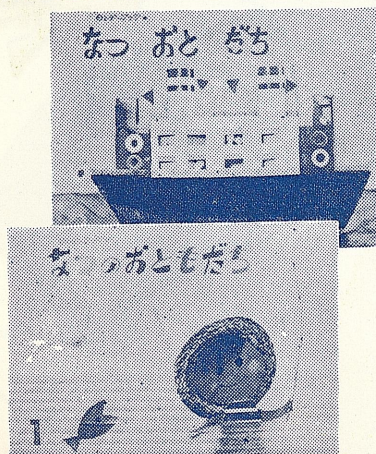
てんとう虫は、なすやかぼちゃにつく油虫をたべる益虫です。でも、てんとう虫にそっくりの、なすの葉をたべる害虫がいたのです。てんとう虫の王さまは驚きました。〔益虫と害虫〕

● ¥ 350

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17〔振替東京〕株式会社 **教育更劇**  
TEL (341) 1458・3227・3400〔29855〕

キンダーブックの なつやすみちょう

# なつのおともだち



夏の幼児の生活指導を中心に、子どもが進んで興味をもつように全体に楽しさを強調してあります。その特長は、お話・絵画・工作・ゲーム・テストなど豊富な内容の中に、「遊び」の要素を、創造力や思考力を養う要素と一緒に組み合わせ、つきからつきへとだんだん楽しくなるようにしてあることです。

- (1)年少用(生活表つき) 50円  
(2)年長用(生活表つき) 50円

発行 **フレール館**



## 幼児の教育 目次

——第六十一卷 六月号——

表紙 林 義雄

- 「領域」について  
 特に「健康」「社会」「自然」について……………坂元彦太郎…(2)
- ★幼児の自然教育について……………太田次郎…(6)
- ★自然の施設への配慮……………高橋系吾…(9)
- ★幼児の科学教育……………栗山重…(14)
- ★幼稚園における「自然」の実際……………お茶の水女子大学附属幼稚園…(18)
- 「社会」の問題点……………津守真…(29)
- 幼稚園の「社会」について……………斎藤敏夫…(33)
- ☆幼児の健康の指導……………松田岩男…(37)
- ☆幼児の運動の指導……………石井宗一…(42)
- ☆幼稚園の健康保育について……………平井信義…(46)
- ☆幼稚園における「健康」の実際……………お茶の水女子大学附属幼稚園…(52)

# 「領域」について

——特に「健康」「社会」「自然」について——



坂元彦太郎

△ Ⅰ V

「領域」という考え方を、現行の幼稚園教育要領がうち出してから、幼児教育界に、一方ではこれに全く依存するような風潮を生み、他方ではやかましい論議のたねになった。ところが、小学校の改訂学習指導要領では、同じことばを、諸教科・「道徳」・特別教育活動・学校行事などを指すのに用いているし、また、場合によっては、教科の中でさらに区分される部門をいっていることもある。このことが、いっそう領域にまつわる混乱を増したが、しかし、幼稚園の先生方の大部分は、この概念なしには教育の中味を考えられないままになっている。こうした事態に即しながら、過度の混乱をおこさないで適切な改正が加えられていいときが来ていると思うが、その問題を概観してみるのも意義のないことではあるまい。

まず、「領域」を無反省に「教科」と同じように使うことが残念ながらいきわたっているが、そのことばを使うことの利便も決してないではない。何といても、幼児教育のことを語るのに共通のカテゴリをもたせてくれたことであり、これによって、幼児教育に関するさまざまな問題も分類整理するわくぐみが与えられたことである。

しかしながら、「領域」にはさまざまな問題が内蔵されていて、そういうものであることを自覚して使うのでなければ、さまざまなあやまりをおこすおそれがある。あげ足をとったり、重箱のすみをほじくったりして、いたずらに人々に不安をひきおこすためではなく、むしろ、「領域」を善用するために、その中に抱いている弱味をはっきりさせておきたいのである。

先ず指摘されていることは、それぞれの領域にまとめられている具体的な内容に、相当の無理があることである。いいかえれば、それぞれの領域の中にあげられている「のぞましい経験」が、一つの部門にまとめられるほど同質的であるとはいえないようなものが雑然としている、ということである。

たとえば、「健康」の領域について考えてみよう。のぞましい経験としてあげてあるものをみると、誰にでも気付かれるのは、保健や衛生のための習慣を育成することに属するものと、身体的な運動に属するものが、併存していることである。この両面は質的にちがいがあはれることはむろんであるが、その上に、これらについての指導上のねらいや方法に大きなちがいがあはれることも見落してはならないであろう。たとえば、前者は原則として教師が常に抱いておるねらいであつて、さまざまな（「健康」以外の）活動の中でしぜんにいつの間にか達成されるようなものであるのに対して、後者は、そうした身体的な運動自身がある程度はつきり露出させて経験させるようにしていい場合が多いのである。——だからといって、「健康」という一つの領域が成り立たないというのではなく、こうした異質的なものがそれなりに併在しているということを知っていて、適切に運営することがのぞましい、というのである。

「健康」はまだいい。ことがらのはつきりしているし、保健や衛生などに関係することはごっそりこの中に入るのだ、としてしまえばそれでまずすむのであるが、「社会」となるといっそう複雑になつてくる。この場合、のぞましい経験としてあげてあることを分類すると、個人的な生活面に関すること、集团的・社会的な生活面に關すること、ならびに、社会生活に關する初歩的な知識の三つの柱をたてることができるであろう。この前二者と最後のものとの間には、非常に異質的なものがあることを見逃すことはできない。後者は、いわば、小学校段階になれば社会科の学習に通ずるものであつて、それにも似た学習形態をとることも不可能ではない。しかし、前二者になると、昔のことばでいえば、むしろ訓育とでもいったもののねらいであつて、性格や習慣や行動の育成に關係することである。したがつて、こうしたねらいが、後者のようなことを通じて達成されることもあるが、もっとひろいさまざまな生活の中で達成されるものである。この両面の混同は、決してのぞましいとはいえない事態をひきおこすこともありうるのである。

さらに、ある論者たちが指摘するように、どちらかといえば、個人的な自我に關係することまで、普通の集团的活動の中にまてしてまわつていくことになるので、それぞれの位置付けがじゅうぶんおこなわれず、幼児期においてのぞまれる自我のめばえを正しく育てることを見失うおそれがある。たしかに、もう一つ奥の次元におい

ては、結局は、社会的な環境の中で自立や自我のめざめがおこなわれるのではあろうけれど、今、教育の実践の目標や中味を問題にする次元では、この両面は一応はつきり区別されねばなるまい。だから、「社会」という領域よりも、たとえば「生活」といった方が適切であるという論も一理はあるが、私は、こうした異質的なものが、便宜上、「社会」という一つの屋根に同居させてあるのだ、ということをおわきまえていて、適切なやり方をすればいい、というように考えたいのである。

しかし、わるいことには、それだけではすまないことがある。というのは、幼稚園教育要領であげている望ましい経験の中で、たとえば、個人的な生活に関することがらのとりあげ方があまりにも部分的であることである。「健康」の場合は、文面におちていることがあっても、類推ができたり、ひとからげにすることができくらいいであるが、「社会」の場合に、個人的な、あるいは社会的な生活における基本的なものが、ここにじゅうぶんにとらえてあるとはいにくいのである。何故そういうことがおとであるか、わけがありそうにもかんぐりたくなるのであるが、おそらく編集に関係した人たちが、自明なことをいちいちあげる必要を感じなかったのではなかろうか。一般的に言って、幼児教育書には、たとえばカリキュラムの編成などのときに、いちばん自明な基礎的なことはわざと書きあげないといった風習があるように見えるのは、皮肉に見過ぎる

のであろうか。例をあげれば、幼稚園にあって、友だちと仲よくあそぶ、ことならんで、あるいはそれより前に、ひとりて安定した気持ちであそべる、といったことがあるはずなのに、こういうことは取りあげない習慣があるようで、幼稚園教育要領の場合も、断断なではなかろうか。だから、これに書いてある文面にはそうこたわらずに、ひろく、こうした生活の態度や習慣に関したことは、みな「社会」に含まれるのだ、と思ってことを処理するのが賢明ではなかろうか。

### △ 3 V

このように考えてきても、「自然」になるといっそう途方にくれるようなことになる。本誌三月号に、太田次郎氏が端的に指摘されているように、「自然」の場合には、もっと根本的なところに問題があるようである。

「望ましい経験」として幼稚園教育要領にあげているものは、大體において、いわゆる自然界の事象に関するさまざまな経験である。こうした自然界についての経験が、幼児においてもそれ自身にねうちがあるのは当然のことであるが、指導書にあるように、「豊かな人間性」を養ったり、「生活に適応」したりするためにそれらがやくだつことは当然であるが、「科学性のめえをつちかう」ということになる、そうかんたんについていいかどうか、私にはよ

くは分らない、ことを告白せねばならない。

私は、ひとつの私自身の見聞を述べることにしよう。幼児が二人、園庭に咲いたサルビヤや矢車草にせつせと如露で水をやっていのを、ほほえましいものとして見ていた私は、あることに気付いて、がく然とした。そして、いろいろなことを考えたのである。

というのは、彼らがそそぐ水は、赤や紫の花そのものに目がけられていたのであった。——幼児たちが、植物を愛護し、自然に親しむこと自体はいいことにちがいないが、そのことが「科学性のめばえをつちかう」ことになるだろうか。現実を実証的に認識したり、すじみちたった法則的な思考をしたりするようなことは、かけはなれたことではないだろうか。センチメンタルに安易に、この無関係の両者を混同してもいいものだろうか。また、幼児期の特徴といわれている自己中心的な、メルヘン的なものの方と、科学的なものの方はまるつきり反対のものではなからうか。いわゆる科学的な見方に通ずるように幼児に無理に押しつけるように努めたところで、結局はうわつらだけにおわるのではなからうか。むしろ、幼児期には、その夢多い自己中心的な生活をじゅうにぶんに経験させておいて、ときがきて、そのレディネスができ、成熟度が達したときに、論理的な思考や実証的な認識へのみちびきやいぎないをすれはいいのではないか。とまで、私は思いつめても見た。

また、思いかえて、こどもたちが幼児なりに動植物や自然界の

事象に親しむことはそれなりにいいことである、そして、それをしぜんにのばしていつているうちに、別のきっかけを必要とするかもしれないが、科学性のめばえの地盤になるかもしれない。しかし、それとならんで、少し成長したら「科学性」につながるようになるであろうような、別種の経験もあつていいのではなからうか。たとえば、箱積木などを組立てているときに、力のバランスなどについての工夫や経験もつたり、紙でつくったヒコキをおくまでとばすことを工夫したりすることが、「科学性」につづくものもつているのではなからうか。領域「自然」としては、むしろこうした面をとりあげることも、考えてみていいのではなからうか。

また、すっかり角度を変えて、素ぼくな、「科学的」経験に通ずるような、遊具やおもちゃを工夫することも考えられないだろうか。それ自身が科学的な態度をやしなうとは思えないが、何かこうした方面からの道が開けるかもしれない、とも思うのである。

重ねて告白するが、「自然」については、私は決定的な意見を述べることができない。しかし、ただこういうことだけがいえる、近視眼的に「科学性」を押しつけたら、情的な自然愛などをそのまま科学性にすりかえたりしないで、幼児らしい経験をさまざまにもたせることであると。

☆

☆

☆

# 幼児の自然教育 について



太田次郎

## 「幼児の教育の基本をなすもの」

幼児の教育の基本をなすものが何であるかについて、多くの考えがあるであろう。そのいちいちについて筆者は知識を有していない。しかし、いづれにしても、それは幼児の活動や生活を基礎として成り立っているものと思う。「あたりまえじゃないか」といわれるに違いない。でもあたりまえと片づけられないところに問題がある。先の文部省の指導書を読んだときも、筆者にとってどうもあたりまえのことと思えないから批判したのである。何をそう感じたかは、二、三の例をあげておいたので、ここで繰り返して述べないが、要は幼児がこれを見たり、これをいじったりしたとき、どうするか、どう考えるかについてよりも、何を教えるかが、指導書の基本になっているように思えることである。

では、筆者はどう考えるか。日頃わが子をみている経験から、賛同の意を表したいのは、本誌の昨年十二月号に発表された、津守氏の「遊びを中心とする保育について」の考えである。その中で、「幼児の保育の中心は遊びである。幼稚園や保育園ではもっと子どもが



遊ぶ時間をじゅうぶんにとる必要がある。与えるプログラムがあまりたてこんでは子どもが遊ぶひまがなくなる……。保育者は子ども遊びを發展させるために準備をする必要がある……」と記されている。まさにこのとおりと思う。したがって、幼児の自然教育を考える場合にも、もりだくさんなプログラムや、なまはんかの科学的知識を与えようと考えないで、幼児が遊び、活動する間に、自分で観察し、工夫し、考える能力を養うように指導するよう心がけることが必要に思う。このような観念に立つと、従来「自然に親しめ」とか「子どもが好む」とかばく然と幼児教育に良いと考えられていた教材や指導方法の中にも、改めて考え直さねばならぬものが多いのではなからうか。むしろ、幼児の活動を観察し記録したことをもとに、新しい教材や指導法も考えられると思う。次に、このような考えをもとに、しろうとの立場からみた、二、三の提案を試みたい。

### 「幼児の活動をもとに考えた自然の指導」

幼児期で養わねばならぬもつとも大切なことは、自分の目で見、自分の手でいじり、自分の頭で考える（もちろん友達と相談し、協力できればなお良い）能力であると思う。この能力さえ与えられれば、将来の自然科学を学ぶ基礎としてじゅうぶんあると思う。したがって、自然とか社会とか分けて知識を与えなくて、幼児の遊びを發展させる形で指導する方が良いように思われる。

具体的な例として、観察と製作活動をあげてみたい。第一の観察

であるが、多くの幼稚園には、美しく整備された花だんがあり、四季おりおりの花が咲いている。今、この花だんの花を外から観察し、先生が、これが花びら、これが雄しべ、これが雌しべと話したところで、多くの子ども達は、花のつくりを自分のものとして理解しないであろう。むしろ、自分の手でさわり、花の中を開いてみた場合、手についた粉で花粉を知らせる方がずっとわかり良いと思う。もちろん、この場合むやみと花をちぎってしまうことは、動植物の愛護ということとむじゅんしてしまう。そこで、花だんをできれば二つ作り、一つの方は、幼児に思う存分いじらせ、さぐらせ、他の一つは、決していじらない約束をしてみたらどうであろうか。このような場合、もちろんいたずらに何をしても良いと放任しておけないわけではないが、先生の注意は最低限にしておきたい。子どもは花びらをちぎり、葉をむしりとるかもしれない。しかし、それによって、植物によっては、たてにさけやすい葉もあれば、そうでない葉もあることを知るだろう。また、根にひき抜きやすいものもあれば、すぐち切れてしまうものもあることがわかるであろう。このようなことを、動植物を愛護し、育てるという精神から、ただ見せただけで指導できるであろうか。このことは、子どものふすまへの落書きについて、ある人が子ども部屋のふすまは自由に子ども達へ開放し、一方お座敷のふすまへ落書きしないようにしつけて成功した例をもとに思いついたものである。

次の例として、製作活動を考えてみたい。自然と製作活動とは違

うではないかと考える人があるかもしれないが、自然科学の基礎として、物を工夫しながら作ることは重要である。ただ、物を作るといっても、美しい完成品を飾るのではない。むしろ、でき上った物より、それを作りあげる過程の方が大事である。したがって完成品を分解したり、さらに複雑なものへ再構成していくことも必要である。このような点で、古くから使われている、つみ木や砂場はたしかにすぐれている。しかし、現在のつみ木では家や船の形だけの模倣ではできても、機能的な面がほとんど作れない。俗にとんとんつみ木などという棒や丸板や、穴のあいた板で構成されたつみ木もあるが、これらもまだまだじゅうぶんでない。現在の科学の発達からみると、プラスチック、電池永久磁石など新しいいろいろな材料がある。これらを使えば、子どもの欲求を今のつみ木よりずっと満足させる教材が作れるように思う。また、まわるとか動くとかの機能をもったおもちゃで、子どもの手で危険を伴わずに分解し、再構成できるものはないだろうか。こんなおもちゃが考案されたら、それこそ実に良い教材となるであろう。果してこれらは大へんむずかしいであろうか。いや、皆が手製のものを工夫して作れば、それほどとは思われない。わが子に与えるべきおもちゃの貧しさを痛感しているのは、筆者のみではないと思う。

このほか、乱暴かもしれない思いつきはいろいろある。雨や雪を知らせるには、測候所の下請け仕事みたいに天気の日記図を作らせるのは意味がない。子どもの頭からかぶる簡単なレインコートのよ

うなものを着せて、雨や雪の中で遊ばせてみたらどうであろうか。以上の例は、みなすで行なわれているかもしれない。しかし、いずれもわが子の経験では、幼稚園のやり方とあっていないようである。しかし、子どもはきつと喜んで、活動し、そこから何物かが得られるように思う。

## むすび

遊びを中心にした保育や、幼児の活動をもとに考えた教育といえ、一部の人から戦後の理科教育の失敗を指摘されるかもしれない。なるほど、戦後の小・中学校の理科教育、生活に即したようなたれた直輸入教育の欠陥は各所であらわれている。しかし、あの場合には、中学生に基礎を与えずに、「良い家の作り方」とか「着物の洗たくのし方」などということを教えたからである。したがって、中性とかアルカリ性とかがわからないのに、中性洗剤を持ち出すような教え方であった。つまり、戦後の理科は、やはり雑多な中途半ばの知識のつめ込みであった。このことが反省され、理科教育の体系化が唱えられるのは良いことであるが、一面逆になり過ぎれば、ふたたび子どもの活動を抑え、子どもの発達を無視したつめ込み教育になってしまう。幼児の自然教育でも同様であって、決して知識を教えることをあせらず、古いことばではあるが子どもの心身をすくすくのばしていくことが第一であると思う。

(お茶の水女子大学)

# 自然の施設への配慮



高橋系吾

「動物を可愛がる人は愛情の深い人で友達に親切な人でありませう。

何時の日か幼稚園に空飛ぶ小鳥が集り野鳥の巣ができ、動物達の楽しい庭にしたいと思ひます。暖い心を持って餌をやり動物達に接していただくようお願い致します。『幼児に愛情の芽を育てる』ことを目標にささやかな歩みを続けております。

この芽が成長しますと棒を持って動物をいじめなく刃物を持って人も人を傷つけない人になると信じます。御協力下さい。園長」

このような掲示を出して小学生やおとな達に訴えねばならない事がしばしばあった。

モルモットが生まれると持ち去られ、伝書鳩も一夜にして盗まれ兎は野犬に襲われ、小鳥の巣箱に集る雀はゴム紐で作った「はじき」や空気銃で打たれ、花壇の草は摘み取られる。このような事が毎年繰り返された。また昨年四月入園式の頃チューリップが一斉に

咲き出して子ども達が大喜びであった。ところが二、三日

後三年保育の園児がしばらくの間に全部花をもぎとって職員も呆然とした事があった。

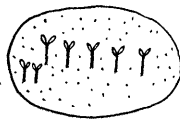
一年後のこの三月にチューリップが若芽を出したのと同じその子どもが「園長先生、水をやるとチューリップよろこ

ぶでしよう」と一生懸命如露で水をやっていた。一年の歳月がもたらした子どもの成長の姿を嬉しく思った。

幼児は鶏のようなもので二足歩くと忘れると言われるが、一度や二度言い聞かせるよりも良い環境に包んで毎日目に触れ繰り返し行なう間に、いつの間にか身につけたり感じさせたりしたいと思つて

いる。  
幼児の心に成長するいくつかの芽を踏みにじらないようにしなければならぬ。今踏まれた芽は成長がにぶり生涯取り返しがつかない。

子どもの心



愛情の芽——かわい、うつくしい  
疑問の芽——どうして、なに、なぜ  
工夫の芽——やらせて、こうしたら  
読書の芽——よんでよんで  
模倣の芽——まねずる

いと考れば大切に育てようと努力すると思う。

この中で子どもの成長に表われる読書の傾向を見ると幼児の時に、よんでよんでと言う頃多く読んでやった子どもほどよく読書するというので、家族が忙しくて充分読んでやれなかった子どもは書物に対する興味がうすいという傾向がある。

何時か読んだ新聞の投書に次の記事があつて幾度も読みながら母と子の姿を思い浮かべ考えさせられた。

ハトと勉強(朝日新聞ひととき欄より)

三男の大羽は八羽のハトを飼っている。中学一年から高校一年になった現在まで、彼の生活記録はハトをぬきにしては語る事はできない。一昨年の秋、こんな事があつた。大空を気持よげに舞うハトを指さし「おかあさん、この間、野良犬にかまれたハトがあんなに元気に飛べるようになった。」私は信じられなかつた。梅雨のころ、野良犬に胴の真中をばっくりやられ、はらわたがとび出さんばかりの友人のハトを預かってきて、どこでどう覚えたのか、カミソリとハサミでたくみに手術を施し、口うつしでエサを与えてついに全快させたのだつた。

そんなハトの好きな彼が、ある日の夕食時「ハトを飼うのをやめろ。」と夫にしかられた。夫は、彼がこのハトへの異常なまでの情熱を勉強にむけたら、どんなによいだろうと願ってしかつたのである。心にもなく強いことばをあげせた夫も、暗い顔をして隣室に消えた彼の、さびしげな姿を気にしている様子だつた。夫

と三男の間にはさまつた私は、この「ハト事件」をどうしたものかと、その夜は頭がいたかつた。

一学期の父兄会があつた時、私に代つて出席した長男がふんがいて帰つてきたことを思い出した。担任の先生が「動物を熱愛する生徒は、友人と共に歩めないという劣等感がそうさせる」といつたのである。

「成績も中の上、あんなに心のやさしい少年に育つたのは、動物のおかげじゃないか。あれから動物をうばつたら不良になつちゃう。」長男はぶりぶり怒つてゐた。私も同感だつた。つぎの朝、三男の机を掃除していると、ノートに一枚の原稿用紙がはさまつてゐるのに気がついた。三男の書いたハトの詩だつた。愛情のこもつた力強い詩だつた。

「大ちゃん、おかあさんはハトの世話をする大ちゃんの姿が大好き——」

友が遊び戯れている元旦から、年賀はがき配達のアルバイトをして、ハトのエサ代をえた彼を思い、私は目頭をソツとおさえた。

ここでは「如何にすべきか」という事よりも環境構成への経験から「何をなしたか」という点を述べたいと思つてゐる。

第一に、自然の指導は言うまでもなく飼育、栽培が総てではないが、実践の努力、継続する根気が必要で少し怠けると鶏舎に鶏の姿無く、飼育舎に動物がいなく、小鳥舎は果箱だけであり、花のない花壇ということになり易い。

幼稚園では飼育し易い動物、栽培し易い植物でしかもありふれた物を選ぶようにしている。

第二、飼育、栽培の種類は少なくとも数多く育てるように心掛けられている。鶏の育雛、小鳥舎の小鳥、兎、モルモットの集団飼育など多数のものに興味を持つようである。

第三、生みの親よりも育ての親と言うように、幼児が毎日餌を与えるように指導する。

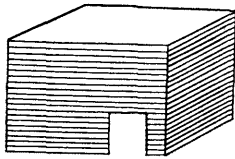
餌は子ども達が毎朝紙袋に入れて持って来てその食べ方や好きなものを知っている。

初めは良い野菜を持って来たが「人間の捨てるもので動物の喜ぶもの」を見つけた。みかんやりんごの皮、人参、大根の葉、馬鈴薯の皮、パン屑など動物によってそれぞれ好むものを知り入園当初は恐れているが間もなく手渡しで食べさせるようになる。手をかければかけるほど愛情は深まるものである。

第四、幼児は動物の親よりも子に関心を持ち親しみを感じるようである。

山羊は開園以来育てて親子二代になり山羊が生まれて親山羊の乳房にすがる姿を飽かずに眺めていた。

小鳥も、兎も、モルモットも繁殖している。兎やモルモットの子を育てるには飼育箱の中に二重に箱を入れるとよい。



生れ立ての時にのぞいて見ると子どもを良く育てない。二重の箱にすると出口を藁でふさいで成長した頃に出るようになる。これは兎もモルモットも同じ傾向を持つようである。小箱は一匹入って充分動ける大きさの木の空箱がよい。

第五、施設の費用を充分とる事ができないのであるべく廃物を利用する。リング箱の兎箱、魚の箱の苗床、空缶詰の植鉢、みかんの小箱の巣箱などいろいろ工夫している。

第六、周囲の人の気持が大きな影響を持つ事への配慮である。園庭に動物を育て始めたのは開園早々の時からで、かれこれ十年になる。父兄や通りがかりの人に園長の物好きに思われたり、動物好きだろうと思われるが事実はその反対で内心恐怖を感じている。餌を与える時でも手を咬まれないかと恐しく思うこともたびたびある。

極端に動物嫌いの母に育てられた為と周囲に飼っている家も無かった。今の園児達をこのように育てたくないということが目的であった。幼ない時に犬でも猫でも家族で飼っていた子どもは大体動物好きである。

動物嫌いという母親の大部分は幼児期に動物と縁の無かった家に育った人が多いようである。地域的の環境の違いも大きな影響を持っている。農村の子どもは美しい花を見ると移植しようと努力したり、またその場所で眺めて楽しむが、都会の子どもは何でも摘みとることを考える。動物に対しても農村の子どもは餌を与えようとする

が、都会の子どもは追い廻したり棒でもあれば突いてみようとする態度が見られる。このような態度を改める教育が知識を与える事よりも一歩も二歩も先に行くべきである。

地域の環境が都会的であり、自然に恵まれない大きな欠陥があるならば、この足りないところを補う事を教育の努力点としなければならぬ。農村地帯で如何に自然に恵まれていても教育的関心を持たせなければ効果がうすい。

ちやうど毎日着ている洋服の総てのポケットの数を聞かれると八ヶか十ヶ位と答える。しかしよく教えると十二ヶ位もありチョッキを入れると未だ多いことに気付く。

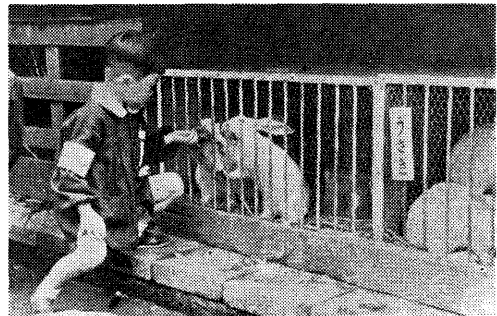
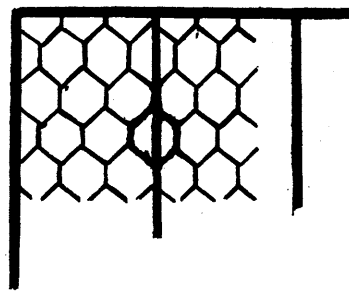
これはこんな身近の事でも無関心に通り過しているからで、一度関心を持って教えれば忘れることがない。毎日目に触れている事でも手を動かして世話をし、その様子を語り、変化を眺め成長に気付けば、そのものと一体になり近親感を持つのである。

第七、施設、設備には最初は費用がかかっても頑丈なものを作るべきである。

兎の飼育箱も何回も荒された経験から箱の前面は下の写真のように鉄の格子に金網を張ったものを使用すると安全で、山羊舎も小鳥舎もそのように作った。

十年間の努力が幾分現われたのか終園後や日曜日に自由に入る子ども達が施設を荒す事が少なくなったことを喜んでいる。

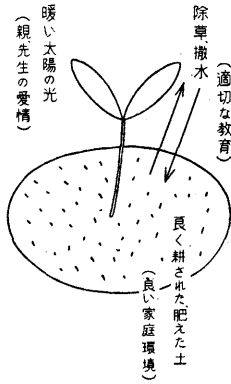
また園児の動物嫌いというものを調査して父兄の協力を求めて毎



日餌になるものを持参させ与えながら馴れさせることに努力している。やがて卒業の頃には一人も嫌いな子どもがなくなるようにしたいと念願している。

第八、最初に述べたように、飼育栽培が自然の指導の総てではないが長期間の計画と多くの配慮を必要とする仕事である。同時に豊かな人間性を養い科学心の芽生えを育てるのに効果のある面を持っている。

四月に花を咲かせるチューリップは秋の中に花壇に球根を植え、その前に花壇の土を作っておく必要がある。



鉢に朝顔を育てるには鉢用の空缶を前もって集め腐蝕土は前年中に山羊や兎の敷糞、残菜、落葉などを利用して堆肥を作れば鉢は小さくとも立派に花が咲く。よい土を作らないと折角成長しても肥料不足から黄色になつて枯れてしまう。植物の成長への努力は教育の姿と似かよっている。

左図の三つの要素は

軽重なく大切な条件である。

第九、自然に学ぶ事は大へん多い。例えば、親鶏の下に集まるひよこを見てみると教育者の心がけが教えられる。総ての雛が親鶏の羽の下に集まり自由に遊ぶけれども、則を越えず、総てのものを平等に愛し、寒さや外敵には身をもって守り、自由遊びの時も親雛は一しよに参加して楽しんでゐる。

第十、栽培の時は数少なくともそれぞれの植物の一生に触れさせるように努力している。

稲は土管のたんぼに苗作りから田植、稲刈まで行ない、稲穂を他から求めたものも一しよにし、幼稚園のたんぼの収穫として園児の家族に持ち帰らせて家族でお米にして翌日の御飯の中へ入れてもらうところまで実行している。園で収穫した幾粒かの米が入る事によつて御飯に親近感がわいてくると思う。

朝顔も種子から種子へ、そして十年間の継続した種子が花を咲かせている。

教育は一面行相統とも考えられ同行の心こそ教育者に大切な心であると信じてささやかな歩みを続けている。

\* \* \*

(道灌山幼稚園々長)

# 幼児の科学教育



栗山重

幼児は自然物であれ人工物であれ、具体的な物さへあるなら、おもしろく遊ぶものであり、その遊びの間に、物を正しく見、正しく考え正しく扱う科学教育ができる。「自然」の保育はいつでも、どこでも、だれでもできると私は考えているが、その實際例を具体的に記してみよう。

いま一本のガラス管があるとして、これで年長組に『科学遊び』をさせる一斉保育の場合を示そう。

## 一、導入をする

水槽の水をコップに入れたい。でもコップを中につけずに、また水槽を持つと重いしこぼしやすいからそれもしないで、これを使って、「このガラスには穴があいている。こういう穴のあるものを何というか知っていますか」と聞き、管ということ、ガラスのはガラスの管ということを知らす。「ストロー」という子があるが、それ

はムギワラのことで、管ではあるがストローとはいわぬことを教える。内容あることば、正しい概念を作るために「自然」で大切な教育である。「このガラス管を使って水をコップに入れましょう。口で吸うことはしないで自分で考えてやってみましょう」と。管を口にくわえると危険もあり非衛生的でもあるし、幼児に考えさせる余地を狭めるからである。

## 二、用意や後始末のしつけをする

幼児にも可能な準備や後始末はやらせる。彼らは活動的でそうしたことを歓迎し、案外によくやり教育効果も豊かである。私は四人を一組とし、各組一番二番三番四番の番号をつけ、彼らにそれをよく覚えさせておく。どの子も等しく活動させ充分に経験させるために、共同さす上にも、能率的だからである。入用な品を用意させる(用具や数はその園向きに定める)。(1) 水槽に水を七分目ほど盛



ったもの、楽に持てる程度のものなら子どもにも用意させ、大きくて無理な場合は教師が手伝って、(a) コップを各組に二つずつ、「一番」と二番はコップを一つずつ持って行きなさい」と、(b) ガラス管を一人に一本ずつ、「三番と四番がガラス管を一人で二本ずつ持って行きなさい」と。持ち方置き方を考え、割らぬよう怪我しないように自ら注意して。教師は結果だけでなくその過程をよく認めてやる。

(後始末もできることは子どもにやらせ、気持ちよく片付けて終わるのであるが省略する)

### 三、管で水を自由にくまます

「どんなにして水をくむか」、先ず自由に試みさせ、子どもの様子をよく見てまわる。管の先きを水の中に入れ、ほんの一滴二滴でもとれると、満足しそれを何回も繰り返す子が多い。

子どもたちは水のとり方を考え、とれた水をこぼさぬようにコップに入れ、注意や努力をする練習ができる。そんなことを繰り返している間に、もっとたくさん取れる方法はないかと「管を深くさしこむ」とか「斜にさしこむ」とかする子も出てくる。遂に「水の入った管の上の口を圧すると、管を外に出しても中の水が落ちないで、多量にとれる」ことを発見する子が出てくることもある。発見の喜び、それは大きく、貴い効果がある。幼児はおとなのように「管の上を圧すると、上からの空気の圧力よりも、下からの圧力がずっと強いために、重力があっても水は落ちない。だから上をおさえよう」と理論的に考えるのではなく、いろいろ試みている間にいわゆる試行

錯誤的に見つかるもので、その経験をさせるのも意義深い。その方法をまねたり暗示を受ける子も出るのがふつうである。幼児は模倣心が盛んであり、それも進歩に役立つ。

### 四、教師がやってみせる

機を見て教師が「だれ君はこんなにしていますよ」とその工夫・発見を認め他の子に知らせる。本人は喜び興味を一層もち奨励となり、他の子は教師から教えられる以上に力を得るものだ。ことばで多くを話すよりも教師が実験をして見せるがよい。その時呼称をつけて「一でガラス管を水の中に入れ」「二で管の上を指でおさえ外に出し」「三で指をのけてコップに水を入れる」「もう一度やってみますよ」と繰り返す。じっと注目して見る子が多い。長い時間は続かないとしても、ある時間そうした態度をとらすことは教育上望ましい。注意力の養成上、直接経験の多い「自然」は極めて有力だと考えられる。

### 五、再びめいめい自由に水をとらす

彼らがどんなに進歩したか。そのやり方・その態度を一人ひとりよく観察する。管の口を指で圧して前よりも一度に多量の水をとる子がふえるのは勿論であるが、中にはそれをしないでやはり前と似たやり方の子も幾人かいる。個人的に指導をすると誰でもできる。教師が実験をして示す時に、口での説明も添え「管を水に入れる時には指でおさえでないでしょう。管を水から出す前に指でおさえるのですよ。水をコップに入れる時は上の指をはなす」式にする

と幼児にも解りやすい。どの子にも徹底させるにはそれがよい。ところが口の説明をさけても相手がよく注目して理解するならば、その方が程度は進んでおり好ましい。子どもには個人差がある。一人ひとりの力を十全に伸ばしたいものである。

#### 六、一定時間をきめてとらす

私は常にストップウォッチをポケットに入れている。「用意はじめ、やめ」と一分間どの子にとらすと、その量にかなりの差が生じるのは当然である。教師が子どもを知る上の一資料になるとか、子どもが本気でやるとか、量の観念を養う一助になるとかの利点がある。

#### 七、さらに二人なり四人なり共同して作業をさせるのもおも

##### しろい

社会的な教育も大切であるが「自然」ではその好機会が多い。二人なり四人なりが心を合わせ力を合わせて遊び、早く多くを取るためには「一度に水を多量入れる」「早くやる」「こぼさぬように」とは自分から考えて実行し真剣な子が多く見られる。一分という同じ時間に、同人数でやったその結果は当然比較をしたがり、注意深く量を観察する。数量形その他方向とか速さとかの教育をするにも「自然」は適している。科学遊びにおいては特に然り。教育は相手の程度に合わせ、どこまでも幼児向きにと私は人一倍考える者である。右のような方法や程度が幼児に過ぎると思う方は、実際に試みるならそれが杞憂で、彼らは大喜びで熱心に遊び、無理なしに効果

豊かな教育のできることを経験するであろう。幼児の緊張注意が、長く続かないことを心理学者は教える。実際そうであろうが、彼らが興味をもつ遊びに対しては予想以上熱心がつづくものだ。疲労が過ぎぬ範囲で心ゆくまで遊ばせたい。子どもは満足し興味は高調し教育効果はますますあがる。「管の上をおさえて、その先を水中に入れると水は入らない」「水の入った管の上を指でしっかりおさえると、中の水は落ちない」「上の指をのけると中の水は落ちる」などの経験は幼児も喜んでやる。でもそれらの理由は解らぬはず、口で説明することは感心できない。ことばだけで覚えさすのでなく、実物について実際の経験を通し本当に理解し身につく知識をねらうべきで、拙速な近視眼的な保育は避けねばならない。知的の目標を重視し過ぎると、材料や方法にむずかしい点があろうが、遊びの中に物の扱い方、科学的なしつけを狙うならばそうでない。幼児に適し興味をもって自分でやるから。

#### 八、安全教育を

しっかりしつけないと私は強く考えるものであるが、「自然」はそれに最も適すると思う。物に直接させ直接経験を主とするからである。「危険だ、用心せよ」など口で言うだけでは足りない。実践させ、身につけさせること、危険に対しては用心し、危険を未然に防ぐ態度の養成が必要で、私はそのしつけに力を注いでいる。本材料を取った中にも、その狙いがあり、管を持って行ったり、返したりするとき、自分や他人が怪我のないように、また机上に置く時に

は、ころがって落ちない所に置くこと、管を使って遊ぶ時には落ちて割らぬように、口にくわえることがある場合には、管が清潔であること、もしか他人と共用することがあるとしたら、清水できれいに洗って渡すなど、その他、水槽、コップなどガラス用器に対しても同様、割らぬよう怪我しないように扱わすのである。

用意や後始末の間にもそうした態度の養成に資するのである。彼らは自分でやることを好み、いちいち教師が認めることを喜び、おとなが考えるほど窮屈に思うものでない。実践また実践反復によってこそしつづけは成功し、幼時からやらすことに意味が多い。幼稚園児だからとて、教師が子どものやるべき領分を奪うことがないか、もしありとしたなら、子どもはかえって興味を失い、よりよく伸びる事を妨げ、真の親切な保育であるまい。

#### 九、幼・小一貫教育について

幼稚園と小学校とは密接に連絡し、能率高い教育が肝要で、両者に深い溝を作ったり、むだがあつては惜しい。小学校側としては、幼稚園を経た子にはその保育を生かし、でない子に対してその程度に合わせ、つまり受け取つた子の力をよく知り、どの子にもそくした教育を行なうべきである。今日の幼稚園は文部省の所管で学校系統に属し、学校教育の出発点はむしろ幼稚園であることを認識すべきである。幼稚園側としては、小学校の教育をなるだけ理解してその準備となることに力を入れるのは結構であるが、幼稚園は小学校の準備ではなく、幼稚園時代を豊かに幸福にする必要がある。「幼

稚園の時でなくてはできぬ教育」「小学校でもできなくはないが幼稚園の方がより適当な教育」がある。それは何であるかを充分に考へて力を注ぎ、小学校の方が適した教育を無理に早くやつて程度の高い教育と誤ることがあつてはならない。どこまでも幼児に最も適した保育をすれば、それはやがて小学校の基礎となり有力な準備ともなるのである。同一材料を両者で扱つとしても、それぞれ相手に真にふさわしく教育するなら、程度に差があり徒らな重複とはなるまい。幼・小両方の先生方が時に会合したり、お互に実地を見合つたり、互に理解を深めることは望ましいが、もっともっと徹底的にと私は多年幼稚園児を直接指導したり、その教師の養成に関係したり、講習で話したりなどして、保育の実状、幼児発達の問題をできるだけ知り、連絡を密接にし、幼・小一貫教育の実をあげたく念じている。

#### 一〇、終りに

人間形成上「自然」保育の重要性を痛感し真に正しい有力な教育をしたいが、教育は理論だけでなく実地についての研究が必要で、私は幼児を直接指導し、反省考察を重ね、本当に幼児の現在を幸福にすると共に、一生の貴い基礎となる教育をしたいものと「自然」もわが園だけでなく各地の園にも出張して、子どもに実地保育をし研究を進めている次第、読者諸賢よ、お互に協力手を取り合つて歩みたく何かと御示教を念じ筆を擱く。

(宝仙学園小学校名誉校長 同短大講師)

# 幼稚園における 「自然」の実際

お茶の水女子大学附属幼稚園

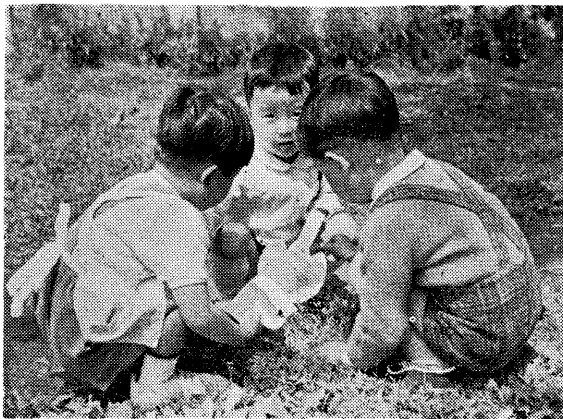
## 三才児と「自然」

村井 トミ

三才児の「自然」について、昨年の経験の中からかくとということであるが、いささか、とまどいせざるを得ない。年令が三才だけに他の保育内容の領域より一層むつかしく、漠然としたものであるからである。幼稚園の年令では主としてそうであるが、三才児は特にすべて教料的でなく「あそび」という一つの大きな目標の中に、あらゆる保育内容を少しづつはさんでいくという方針でやっている。それだけに「自然」を取り出して、これこれのことをしたということは言えないし、また言いたくないところである。

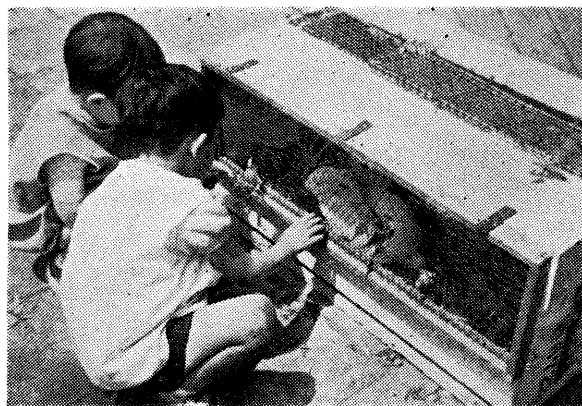
一般の傾向として、三才児に限らず五才児でも「自然」ということに対して、何か目に見えたものをやらなくてはならないというような考からか？ 少し行き過ぎていっているのではないだろうか。球根を植えるにしても、さなぎの変化をみるにしても、やってはいけないのではない。大いにやってよいと思う。が、その方法に無理があり、いずれ小学校で習うであろう理科を、程度をおとして教え込んでいえるような感がする。細かい一つ一つの変化をメモしたり絵にかいたりして保育室にかかげなくても、先生や友だちと一しょに世話をしたりその変化におどろいたり、よこんだりする。このこと自体が大切なことであろう。子どもは教えれば結構覚える。しかしそれだからと言って早くおとなにしたてて立派な教育とは言えない。先は急がなくても、小学校で充分にやってもらえるのだから——。いかに、こういう事に関心をもち、動植物をいっ

それだけに環境としては十二分の配慮がされなくてはならないし、教師自身も、自然に対して充分の学識をもち興味をもっているようではなくてはならないわけであろう。



話がよこ道にそれてしまったが、三才児の問題にもどすことにする。

それならば三才児には「自然」はむづかしいから放っておくかという、そうではない。三才は三才なりに、身近なものを見たり、動植物をかわいがったり、いろいろの物を拾ったり集めたり、指導要領にもかいてある最初の方の項目は、最少限に必要である。



これらのことは、すべて幼稚園生活の中、あそびの中に、それこそ自然に出てくるものであるから、反面から言うと教師も子どもと一体になって、動物を見たり、虫をつかまえたり、根気よく花びらを集めたり、庭の石を拾ったりというように、充分に自由あそびをさせることであるとも言えよう。つまり、「自然」ということに、まっしぐらに取りくまず、生活やあそびの中で教師が機をとらえ、扱うということであろう。

こういうことをしている中に、自然に形とか色とか、硬いとか、やわらかいとか、大き

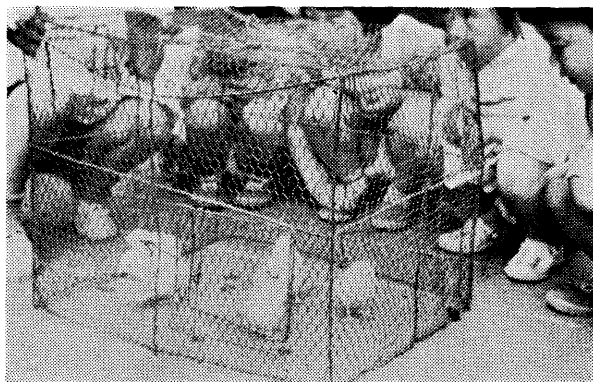


いとか、小さいとか、重いとか、軽いとか、兎やにわとりが、どんな草が好きでよく食べるとか、いろいろのことを次第に理解していくのである。

私の園でも例外ではなく、兎や小鳥や、にわとりや、モルモット、金魚などを飼っている。私は子どもと充分にこれらでたのしんだ。あのヨチヨチした小さい子が、朝、顔を輝かせて新聞包をもって現われる。何かと思うと人參が大切に包まれていて、兎にやるのだというこれも、しばしばあった。家に帰っても、あの兎のことを忘れないのだと思うと何かほんのりと心あたたまる思いであり、これでいいのだ、これでいいのだと、心でつぶやいたりした。

こうやって動植物をかわいがる気持の一方に、金魚やお玉じゃくしを手づかみにしたり、きれいな花を惜しげもなく折ったりするのも三才児である。それも二学期頃には次第になくなってはくるが……。

花びらや木の葉もよく拾った。めいめい簡単な手さげをつくってから、うたいながらよく拾ってあそんだ。この「花びらを拾う」こ



との中にも、製作あり、自然あり、言語あり、音楽あり、健康あり、社会あり、すべてが一体となって含まれているのだと思うと、ただのあそびの一種類というよりも、もっともっと深い意味があると思われる、充分にあそばせようと思うのである。

また、春秋の遠足の他に、よく散歩につれ

出した。大学のグラウンド、ヘルスセンターのそばの緑の芝生、金魚の浮んでくる池、ころころドングリの落ちている雑木の下など、思いきりかけ廻り、ゴロゴロころがった。蝶々を追いかけたり、バッタを探したり、途中で見つけた蟻の行列に大半の時間を費したり、思えばあの小さい人たちと過ごした、たのしい時が次々によみがえってくる。

これらのことは、子どもの生活の中に、当然生れてくることであるから、教師としては環境を充分に与えてやること自体が大切なことであろう。

もう一つの面は教師自身の中にあるといってもよいことで、「子どもの質問を大切にしてください」ということと「子どもから生れた科学的の芽生えを大切にしよう」ということである。

三才では科学の芽生えなど、何だか大それたことのようにだが、よく見ると小さいながらにひそんでいることがある。大きい積木などでなかなか考えてすばらしいロケットをつくらたり、なるほどと思うような乗物をつくらたりする。自動車のハンドルをうまく工夫し

たり、穴のあいた組木や棒でよく動くものを作らしたり、汽車の坂道などおもしろくつくり、こんなこともみんなおろそかにはできない。こんなこともあった。黄色いラケットを室の入口で持っていた子が、ドアの外陽のあたる所と、ちょっとひっこめた室の陽の当たらない所とで、その黄色の色が、とても違うことを発見して、何度もくり返してやっていたことがあった。また、青い空にくっきり描かれたヒコキ雲に眼をみはり、おべん当の時など、スプーンにうつる顔が話題に拡がったり、天上にうつった七色の光におどろいたり、先生の使うちよっとした道具、ホーチキスや穴あけ具などに夢中になったり、数えあげれば、幼いなりに、おどろきや、よこびや、工夫があった。

これらを教師は細心の注意で観察し、具体的な機会があったら、友だちにも知らせると共に、よろこびもおどろきも、子どもと共感し、必要によっては助言も助力もおしまないということである。

質問を大切にすることは、ここで改めてのべるまでもないが、あの三才児のたわいない質問に根気よくこたえ、相手になってやるこ

とが大切であろう。

もう一つ気をつけなくてはならないと思うことは、このように自由なあそびや、生活の中から経験し、得ていくことが多い、この「自然」では、幼児のみにまかせておくと、うっかりすると一方的になり易く、個人差が大きくなるということである。もちろん、幼稚園では個人の指導ということが大切なことではあるが、落ちこぼれの子のないように、教師は子どもを充分に誘導して、多面的に経験の場を（あそび）持たせるということが大切ではないかと思う。

昨年の一年間を三才児と共に楽しくあそび、家庭的な雰囲気でも過ごせたことは、本当にうれしいことであった。

今考えると、とりたてて「自然」とりくんだわけではなかったが、三才なりの過ごしかたはしてきたつもりである。

## 四才児と「自然」

富樫 純子

子どもたちの日常生活の中には、子どもたちが自然の中で、自然に親しみを持ち、自然に愛情をもって楽しんで、いきいきとした姿が見受けられる。

自然の指導をどうしたらよいかなど、自然だけの領域を取り上げて言うのは、無理であることは当然であるが、昨年受け持った四才児が一年間、自然に関係あることでは、どんな活動や経験をしたり、どんなようすであったかを取り出して、ふりかえり考えてみることにする。

子どもたちは自然の中で生活して、自然の中で育っているの、自由に遊んでいる間に自然に属する遊びが非常に多い。このため自然では、自由遊びの中の指導が重要になってくる。自然に親しませ、自然への興味を深めるために、自然の中で子どもたちの遊びと遊ばせるということに考えた。次に自然の指導では、直接経験によることが望ましいことなので、環境が大切であるということはある。環境と言えば当園は幸に、自然の山があり子どもたちは、毎日毎日この山をかけまわって遊んでいるわけであるから、この恩恵に浴するところが多いとい

わなければならぬ。

### ○ 一学期

時期をおって思い出してみると、四月頃は入園した子どもたちも、昨年からの子どもたちも、園庭で春の日ざしをいっぱいあびて自由に遊んでいる。この自由遊びの時に、山のつみ草のできる所で、夢中で草をつんでクロローバーを首飾りにしたり、はこべ・クローバーなどをつんでは、園庭に飼育しているモルモット・うさぎ・にわとり・小鳥などに草を食わせて可愛がっていた。どうしても幼稚園では子どもたちが自由につんでもい、いわゆる雑草園というような草原があることが望ましいことになる。飼育しているモルモットなどでも、子どもたちが、草、にんじん、果物の皮など食わせているので、えさをやりすぎて死ぬなどということがなければと、心配されるぐらい、変りばんこにえさを与えていた。幸にモルモットはえさをたくさん食べさせても、自分で必要な分だけ食べるので、幼稚園などでは飼育しやすいもの一つである。もう少しモルモットがなれて、子どもたちが自由に抱いて遊ぶということができるようになれば、もっともって効果的であ



ると思う。この飼育動物たちは年間を通じて子どもたちの本当によい友だちであった。

えさをやっているうちに、にわとりはこの草が好き、うきぎはこれは食べないなど、子どもたちが自然の中に覚えていくようであった。花や葉っぱを使ってのままごと遊びや、つみ草をした草で遊ぶ、草角力といわれている草のひっぱりっこ遊びなどもよく行なわれていた。こういう時、幼児の特質として教師が仲間に入ると、子どもたちの興味は深まり、遊びはより発展するようであった。

園庭の散歩の途中、小鳥小屋の前に立ち止って、インコ、十姉妹、鳩などをあきず眺めたり、話しかけたりしている子どもたちの姿を見るにつけ、いろいろの動物や小鳥などできただけ飼育して環境を整えることが必要だと痛感した。花だんにきれいに咲いているチューリップを見ては、覚えたチューリップの歌をきかせている姿など見ると本当にはほえましかった。

また落ちていくつじの花やはくちょうげの花をつないで、首飾りや腕飾りつくりをするのもこの頃の遊びの一つであった。広い大学のグラウンドに行って、たんぼぼのわたげを一生懸命とばして、驚異の目を見はったりした経験も子どもたちには貴重なものであった。蝶々を追いかけてまわして遊んだり、まる虫やてんとう虫のいそうな所を探して、

庭の隅や、石をどかして見たり草をわけて探したりして遊んだりもした。

自然の指導はただ子どもたちの興味にだけまかせておいてよいというわけではなく、自然に対する興味や関心は個人差があるもので、子どもたちのようすをよく観察して適切な指導が必要である。自然への興味、関心の少ない子どももいれば、飼育動物をこわがって、近寄らない子どもなどもあるので、こういう子どもへの指導には教師のたゆまない努力が大切である。

遠足という経験も欠かすことのできない活動の一つである。都会の中で育っている子どもたちに、自然のありのままの姿にふれることができて、広々とした所で一日思いきりのびのびと遊ばせるということを目的にして、春は日産厚生園へ遠足に行った。途中井の頭公園の池の鯉がえさを食べるのを見たり、樹木なども何年もたったのをびっくりして見たり、厚生園の花だんを見たり、まっぼっくり拾いを楽しんだりした。

五月の中頃を過ぎれば、子どもたちも幼稚園に対して安定感を持って遊んでいるので、ただ教師の計画をおしつけるのではなく、子ども



もたちの動きをよくみて、子どもたちの興味のありそうなもの、機会をつかまえて適当に教師の助言や助力をするように心掛けた。それと共に、子どものおどろきに共鳴するようにも努めた。

風車をつくってまわして遊び、どうしたらよくまわるか工夫したりした。金魚を見に行くとということもこの頃の楽しいことの一つになった。花だんに水をやったり、草をとって世話をしたり、ありを見つけては、ありの巣を探したり、飛行機雲ができたのを眺めたり、雲を見ていろいろ想像したり、黒い入道雲の動くのを見て驚いたりもした。

## ○ 二期

種子をどったり、虫を追いかけまわして遊ぶのが、興味の中心であった。広々とした大園グラウンドでの虫取り、山での虫探しと毎日のように子どもたちは、虫と遊んでいた。庭の砂利石の中から、白いきれいな小石だけを丹念に拾い集めて、ままごとの御飯にしている女兒のグループもあった。

十月の初旬に、虫めがね・じしゃく・砂時計を自由に使って遊べるようにした。早速じしゃくを使って、つくものをつかないもの

を試してみたり、じしゃく同志つけてみたり、砂の中に入れて砂鉄のつくのをふしぎそうに眺めたり、砂鉄を集めたりした。虫めがねでいろいろのものを見て歩き、ピアノの鍵盤の模様までも見たり、眼の所にやり、「あつ君の眼が大きく見えるよ」と驚きの声をあげたりしていた。砂時計は三分計と一分計の二つがあったので、二つを「よいどん」と競争させ「青かてーピンクかて」と応援したりして見ていた。何日かたつて、こっちの砂時計が三回ひっくりかえし砂が落ちると、こっちの砂時計が一回と同じに砂の落ちるのはどうしてかな、というような疑問を持ったり、いろいろ試して見ていた。

グラウンドに行ったとき、かげふみ遊びをしたいと言い出し、どうしたら自分のかげをふまれないで逃げられるか、子どもなりに一生懸命工夫していたようだった。いのこづちが洋服や、靴下につくのがふしぎであり、おもしろいようであった。

秋の遠足は、いもほりで、最近のように恵まれません、おいもは八百やさんにあるものと思っていない子どもたちには、本当によい経験であった。次から次へと土の中から出

てくる大・小さまぎまのおいも、つながっているおいもに歓声をあげ、刈り取った稲の干してある所を見たり、南京豆が土の中に埋っているのを見せてもらったりした。自分で掘ったおいもが、とてもおいしかったということは、子どもたちの話題になった。

クワカス、ヒヤシンス、水仙などの水栽培を部屋で始めたのもこの頃であった。十月の末頃になると、幼稚園の山にいろいろなきれいな葉っぱが落ちて、集めることの好きな子どもたちは早速拾い集めて来る。集めた葉



つばをのりではったり、模様になべたり、ままごとに使ったり、胸にさしたりしていた。

大きい順にならべて「お父さんの葉っぱはこれ、お母さんはこれ、赤ちゃんの葉っぱはこれ」と言いながら分類している子どももあつた。こういう時、教師のちょっとした励ましや助言で、遊びが楽しいものになった。

園外保育に植物園に出かけ、ふだんあまり見ない大小さまざまな木を見たり、猿やえびがにを見たり、広い所で遊んだり、まっぼっくりを拾ったりした。年長組が春咲きの球根を花だんに植えているのを見たりもした。

おもちゃやさんごっこをした時、こまをつくりこまをまわしてみても、この色とこの色と混じるとどんな色になるか調べたり、双眼鏡に色のセロファンをつけ、いろいろなものが赤く見えたり、青く見えたりするのをふしぎがって眺めたりした。

男児のグループは積木をつむには、どうしたら倒れないで高くつめるか、何日も何日もかかって工夫し、よく考えて下の方から順々にしっかり積んで、自分たちの背より高いビルディングをつくって遊んだりもした。

飛行機とばしも楽しい遊びの一つで、どの

飛行機がよく飛ぶか、考えて折ったり、とばし方も考えている様子であった。

### ○ 三期

室内遊びが多いこの頃、ブロック積木を使って遊ぶのに、なかなか立つものができないで、試めし試めし三日間ぐらいかかってみんなど考えたり相談したりして、立体的な立派なお城を作り上げることになった。

霜や氷が子どもたちの興味の中心で、霜取りや氷探しの活動が盛であった。どういう所に霜ができるか探したり、霜を取って来ては日の当る所においてとけるのを見たりした。本当に自然は子どもたちに、次々といろいろの材料を提供してくれるので感謝しなくては思つた。

プリズムをのぞいては、虹のようにきれいに見えるので喜んで使つて遊んでいた。

水栽培のクロッカスやヒヤシンスの花の咲いた時は、子どもたちは驚き、喜んでいた。鉢植えの桜草やシクラメンにも、毎日のようにお水をやって世話をするのを楽しんでいた。霜よけの取れた花だんに、可愛らしいチューリップや水仙などの球根の芽が出ている



のを見つけたり、園庭に草が出て来たので、はこべなどを取って来ては、動物たちに食べさせていた。

こうして一年間をふりかえってみると、子どもたちが、活発に自発的に活動するのに驚いたり、刺激されたりして、教師も共に学んで進んできた。これからは子どもの実態をつ

かんで、子どもの経験範囲を広く豊かにし、子どもの自然に対する愛情をすくすくと伸ばすように努め、教師は常に子どもと共に遊び、子どもの発見について共に驚き、年齢相応の最も適した活動、ねらい、指導方法など研究していきたいと考えている。

## 五才児と「自然」

### 村石京子

五才児の級を受けもった一年をふりかえってみて、六領域の中で何をどのように扱って過ごしてきたらうか、特に「自然」の項としては何をやってきたかを考えてみる。今まで数多くくり返されているように、六領域といっても幼児の生活自体種々な要素が混然としており、一つ一つが分離独立した形のものでないことはいうまでもない。更にまた「自然」に関しては特に将来の理科の教科との連関はあることはもちろんだが、現在はそのを意識せずあそびを通してふれていきながら身近にあるものを細く観察し、興味をもち、

より深く知りたいという心をいだかせることが大切であると思いつながら。

#### 〇一 学期

桜の花が満開となりチューリップのつぼみもやわらかくふくらむこの時期には、園の庭には小さな蝶が花を尋ねてひらひらととんでいる。すでに一年または二年の園の生活経験をもつ五才児は、園の庭を我が家の庭と同じように親しみ探索している。目ざとく蝶を見つけた子どもたちは何とかがとりたいものと苦心しているが、蝶も彼らよりも身軽くてなかなかとれない。子どもたちは道具の必要性を思いついた。「先生、ちょうちょうとりのあみない?」「明日 買って来てよ」と教師に頼んで庭であそびだしたが、やはり目の前でひらひらととぶ蝶への誘いは明日へのばすことができない。「あみつくるから布ちょうだい」と次の課程へ進む。「それじゃ手伝ってあげるわね」と教師と子どもたちと共同作業でありぎれと竹の棒で手製のあみができた。セロテープやセメダインを一ぱいつけてできたちょうちょうとりのあみにいけどられた蝶は、早速これも手製のセロファン張りの箱に入れられた。やがて幾つかあみにかかると今

度はとった蝶の名前を調べる仕事はじまつた。もんしろちょう・もんきちょう・しじみちょう・くろあげは、など知っているよと教えているもの、図鑑で調べるよというもの、それぞれの興味の深度と態度が知れるようなおもしろい場面が展開されるのであった。

五月下旬頃郊外へ遠足に行く。現地解散であり親子いっしょであるので、ちよつと足場のばしてという思いの人達が多摩川べりまで行ったらしい。翌日「昨日みんなでとったの」とめだかとかどじょうをびんに入れて持参した子どもがいるので部屋で飼うことにする。めだかは気持よきそうにすいすいと泳ぎまわっているけれど、どじょうの方は泥の中がこいしらしく水の濁りの中へ身をかくすようにしてじっとしている。それをとるとき活躍したであろう子どもたちは「何を食べさせたらいかな」とえきを心配している。それからひきつづいて、おたまじゃくし、かえるなどが日曜の翌日というと続々と登場するのであった。そして子どもたちは机のまわりでそれらを見つめながらうたうたのであった。「……どじょつこだのふなつこだの春になつたと思うべな」めだかの学校は川の中……」

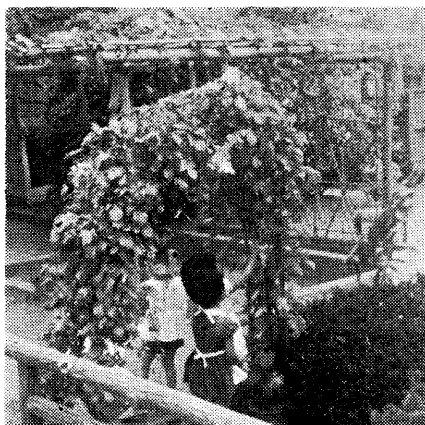
「くろいくろいおたまじゃくし……」などと。それは歌というより、小さな友だちに対する話しかけのことばと解釈することが当てているのであろう。

八十八夜も過ぎて幾日かという頃、朝顔のたねまきをした。これは一人で一鉢ずつ自分の鉢をきめて育て、たねをまいてから芽を出し、やがて花が咲いてまたたねが実るまでを継続観察するのである。自分の名前のついた鉢から芽が出て来たときの喜びは大きかった。毎日毎日せっせと水をやり「もうこのくらい大きくなった」とか「はっぱが何枚になった」とか報告がある。こうして夏を迎えるまで大事に育てられた朝顔の鉢は、夏休みに家にもって行って花を楽しむのである。今年は花の輪は小さかったが数はとてもたくさん咲いたそうである。昨日は細いつぼみであった朝顔が朝起きてみるとぱっと開いているのも、自分が育てたという気持があると喜びは一おのようであった。

## ○ 二期

秋の初めは夏に咲いた花が実をむすび、たねとりをよくした。更に九月、十月の虫とりは一学期のちようちよとりからまた躍進して

いる。むし、むし、と虫とりにあけくれた毎日であった。ばった・こおろぎ・かまきり・ちょう・とんぼ・かたつむり、種々つままえられては箱に分類して飼われている。昆虫への知識欲旺盛な子どもは、ばったの種類を調べて自分でつくった小さなノートにかきこんで、それを片手にばっ



たねとりしまししょう



こんな大きなおいもがほれたよ

たどりである。ある日、こんなことがあった。「今までと違う虫みつけた、調べよう」と騒いでいるグループに顔を出すとびっくりしてしまった。どこでつかまえて来たのか、近頃名前をよくきくごきぶりだったからである。秋も深くなると庭の樹木の葉が美しく色づいてくる。それを拾い集めてきれいに洗ってままごに使用したり、いろいろ並べては模様あそびをしたりすることも一しきり盛であった。

秋の遠足は楽しかった。いもほりに行ったのは親子共々はじめてという人が殆んどである。大きなきつまいもがぞくぞくと地面から



掘りあげられるのに、目はまるくなり、歓声は次々とあがるのであった。このいもほりの他に年長組だけで動物園にも行った。子ども動物園で園内に放しがいになっていくたくさんのやぎ・ぶた・かんがるー、その他を相手にだいたり、えさをやったり、一しよに走りまわったりした喜びの一日であった。この日のあと幼稚園にいるうさぎやモルモットへの愛

着も一だんと強まり、よく世話したがるようになったことを思うと本当によい経験であったと思うのである。

### ○ 三 学 期

虫めがねを幾つか子どもたちに使わせてみる。珍らしがって何でもかでものぞいてみているので、なかなかみる番がまわってこない程である。いつだったか、おべんとうのサラダナを「これにはよく回虫のたまごがいるんだよ」と言い出して、「お母様がきれいに洗って下さったから大丈夫」といくら説得してもきかず、とうとう自分たちで虫めがねで仔細に点検したときには笑いがこみあげてしまった。虫めがねの実験は更に続けられた。きつと上の学校にいる兄にでも教わたたのであろうが、パラピン紙をほしいというので与えると、それに黒のクレパスをぬって太陽光線を虫めがねを通して焦点化すると黒い部分は燃え出す。これをやってみなに見せている。「僕もやってみる」「私も」とこれはとてもはやった。そして「太陽の原子エネルギーを吸収する機械をつくらう」と箱をたくさん組み合わせた不思議な機械もできあがった。私も学校時代同じようなことを授業中に詳しい説

明とともにやった経験があるが、子どもは原理は知らないが「うまく光を小さくしてその中心をつくってそれを黒のところにあてるのだよ」と友だち同志教えあっているのを見て、こうした強い興味が将来の科学性をどう培かっていくのだろうと思うのであった。

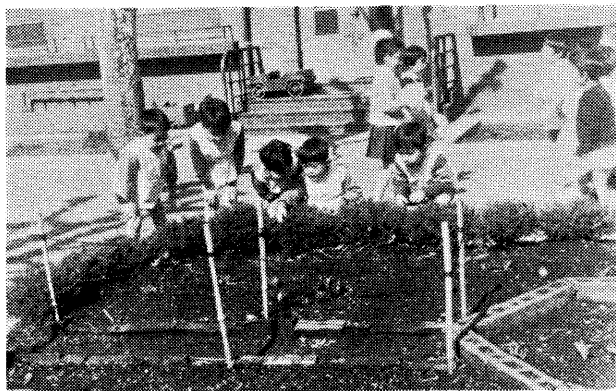
二月の寒さの続いた頃、テレビで雪と氷の話をやったことがある。それをみたあとで氷をつくらうということになった。『バケツに水



虫めがねでしらべよう

をあまりたくさん入れないで」というテレビの中のことを覚えていて教師の代わりに注意している子どももいる。男と女のグループに別れて各々バケツをもって寒い場所探しとなった。山へ行ったり木のかげにおいたりいろいろ苦心の末、女児のグループは物置の石べいよりのすみに、男児の方は遊戯室のはずれのへいに沿った空地においた。これは園の庭のはずれとはずれに当る。そして翌日を期待しながら家路についた。翌朝はみんな「氷できた？」とききながら部屋に来る。「みんなで見に行きましょう」とぞろぞろと行ってみると、物置のわきのバケツにはうすい氷はっていた。「わあ、できている できている」「僕たちの方は？」と勇みたって走っていった数人が失望した顔でもどって来た。「あのねー 日が当たってるの」「ぜんぜん だめだ」。いそいで行くと、なるほどバケツには朝の光がさしかけていた。因みに昨日は曇で日はさしていなかったのである。そして「もっと寒い場所さがそう」というがんばりやと「あの物置のある方が北でこっちは東だね。北は寒いから氷ができたんだね。先生」と知識的問題解決型とがこの場合もみられるので

芽が出てきたよ



あった。だんだん春が近づいてくると十月から育てていた水栽培のヒヤヒンスが急激に伸びはじめ、やがて花が開いた。一方の庭の花だんじうえた球根にも芽が出はじめた。「水栽培の方が早く花が咲くのね」「きつとお部屋が暖かいからね」「水がたくさんあるからよ」な

どと種々な疑問や解釈がでた。そして雑草をぬいて来て土をいれた箱とビニールの袋に水を入れた水栽培の比較実験を自分たちで試みはじめたのもこの頃のことであった。

××××××××

思い出すままにここ一年の生活の中から書きつらねてきたが、しかしまだまだ書き続けられつけない。「自然」の領域のことは初めに書いたようにとりたてて意識して指導はしていないが、しかし折にふれことあることに日常接しているのが五才児の「自然」なのである。そしてその経験は他の領域即ち、音楽リズム・絵画製作・言語・健康・社会、全てへと直接結びついていることに思いを深くするのである。幼稚園の生活即ちあそび自体の中にどんなに数多くそれが含まれているか、目にみえ、手にふれるもの、彼らの興味あるところ全て「自然」に関したものがあつた。この点に着眼し、教師は直接経験をともなうよう豊かな環境設定に留意するとともに、その興味の伸張と疑問の探究に幼児と行動をともにしていくのが、将来の科学性を育くむ基本としての現在の「自然」のあり方なのであると考える。

# 「社会」の問題点



津 守 真

幼稚園の「社会」ではいったい何を問題にするのかということも私も久しく考えてきたことであつた。いったい「社会」の保育とは社会性の保育と考えてよいのか。あるいは社会のことがらを学ぶことであるのか。社会性という個人の社会的側面に限定されてくるが、もっと相手をふくめた対人関係を考えるべきではないか、などなどの疑問が次々に出てくる。また、実際の幼稚園に接してみると、庭のすみでしくしく泣いている子どもを、先生が通りすぎりに「どうしたの」というだけで、少しも子どもに同情心を示さないので通りすぎながら、部屋の中では高尚な歌やリズムをやっていたりする。幼稚園に入った当座の子どもは、まだほんとうに幼いのである。赤ん坊にほんの少し毛の生えたくらいの子どもを、たくましい少年少女の世界に導入する役目を果たすのが幼稚園の時期である。いつも皆で集って、静かにさせられて、新しい歌や製作を覚えて、それでいながら遊ぶということはほとんどないような生活、それはいつ

たい幼児の生活といえるのだろうかと思つたのである。幼児自身の生活をどこかよそにおき忘れたような上すべりの幼稚園教育であつてはならない。もっと幼児の生活そのものであるような教育の場がほしい。幼児が心からたのしみ、その中で教育が幼児のからだの中にしみこんでゆくような幼稚園がほしい。そのような幼児の生活そのものを研究し、それに必要な教育対策を考えてゆくような場が必要である。それは幼稚園教育全般に通じる課題であると言つてよい。しかし、そこに個々の領域が分化してそれぞれ独自の教育内容を主張し、教育課程が論ぜられてくると、上に述べた幼児の生活はいつのまにかぬけてしまうのである。もちろん、誰でもそれは重要なことと認め、幼稚園教育全体の問題ですよという。けれども、幼稚園教育全体の問題とすることは、逆にいうと、どこでも扱わない問題となりかねない。そこに私は「社会」という領域の特殊な位置を認めたい。「社会」は他の諸々の知識技能領域の中の、社会科

知識を担当する分野ではなく、理論的というならば、幼児の対人関係、対集団関係、対文化関係のすべてを包含するものである。もつと実際にそくしていうならば、幼児の幼稚園生活に対する適応、遊び、友人関係など、幼児の生活に身近な問題と、その教育的配慮に重点をおく領域と考へたい。

さらにまた、幼児期は人間の生活の中でも人間形成の重要な時期であることを考へたい。青少年期になって、いろいろの問題行動を起す場合、性格上の問題、学業の問題、非行など、その動機や原因の一つを幼児期に見出すことは少なくない。逆にいえば、幼児期の取り扱いによって、後の問題行動を予防することができる。そこで問題になることの多くは、母親が子どもをどのように扱うか、先生が子どもをどのように扱うか、問題行動の発端をどのように発見しどのように処置するか、後に問題行動を發展させないための一般的考へをどのくらい払っておくかというようなことである。このような予防精神衛生的考へは、幼児教育の強調すべきことである。子どもの生活にそくして、正しい幼児教育を行なうことは、後の問題行動の予防にも役立つ。そして「社会」でこのような点をも正面から扱わなければ、他に扱う場所がない。

以上のような前提のもとに、「社会」で問題になることを整理してみよう。

## 一、集団生活に適應する

幼稚園に入園して、幼児はまず母親から離れて、新しい場所、知らない先生と多勢の子どもとともに過ごす生活に適應せねばならない。新しい経験をすることに不安が伴うと、子どもは新しい経験に消極的になる。またこの適應ができないと、幼児はいつまでも集団生活の中で自分を發揮することができず、不安定な気持になり、幼稚園がきらいになる率も多くなる。

子どもを母親から離すということは、乳児期には子どもに大きな衝撃を与え、發達全般に及ぼす影響も大きい。幼児期にはむしろ母親以外のおとなの管理のもとで生活するのを学ぶことは望ましい経験といえる。しかし子どもの年齢が小さいほど、母親から離す際に配慮すべきことは多いのであって、それが母子ともに突然の経験とならないように予め準備し、また徐々に離す試み、先生が個人的に接し子どもを安心させてゆくための技術などが必要である。これらの問題に対して、たんに経験的に一定の方式をとるのではなく、個人差などをもあわせて、正面からとりくんで研究してゆくことが必要である。

集団生活に適應するということは、たんに集団のきまりや習慣になじむというだけではなくて、それは子ども自身の自分自身に対する適應の問題でもある。集団生活の中で、自分自身がびったりとした感じをもって、よそにきたという感じではなく、そこに自分の生活があるという感じをもたせることが必要である。それには先生が



子どもを受容するということが重要であって、そのための技術は大きな研究課題である。

## 二、先生を信頼し、先生と応答することを学ぶ

子どもは先生を通して、他人のおとなを知る。おとなを恐れず、わぶれずに応答し、おとなに対しても自己の本領を発揮して接触することが必要である。入園当初の子どもは、はじめ先生を独占しようとし、先生に話しかけてこたえてもらいたがる。それから先生に親しみや愛情を示し、先生を信頼するようになる。それから先生が言ったことを考えて応答し、子どもも先生を理解するようになる。先生が子どもを理解するだけでなく、子どもも子どもなりに先生を理解することによって、心の通った教育の場が成立する。ここで先生はどうやって子どもに近づいて、子どもに理解してもらえるかを考えねばならない。

## 三、他の子どもと遊び、相互に応答することを学ぶ

他の子どもとともに遊び、他の子どもと会話を交し、相互に応答することは、社会で研究すべき中心的なことがらである。幼児が自己の本領を発揮して、思う存分に他の子どもと遊ぶところに幼児らしい生活がある。どのようにしたら子どもも同志で真剣に遊ぶことができるか、それにはどのような材料が必要か、建設的な遊びに発展させるには教師の側には何が必要かと考えることは社会の中心的課題の一つである。また、あるときは相手の子どもに提案し、リード

し、あるときには相手に従うことを学んでゆくとともに社会性の重要な問題がある。数人の子どもも同志で協力して、役割をもって遊ぶことができるようになると、遊びの中に製作や音楽リズム、言語などの題材を折りこんでゆくことができるし、ここでは「社会」が他の保育内容を結び合わせる接着剤となる。

## 四、集団生活の中で個人の興味を追求する

「社会」で扱うのは常に集団との関連のみではない。集団生活の中で個人生活を保ち発展させることも社会的適応の一つである。他の子どもがまわりにいても、自分の興味のあることをやっていることができるということ、自分のやりかけたことを最後までなしとげられること、自分で興味をみつけてそれに没頭できることは集団生活の中で尊重され、養われなければならないことである。「社会」の中では個人の研究が必須であると考える。また、集団生活の中で突然出合わねばならないフラストレーションに耐えるだけの自我の力を養うことも重要である。個人差をよく認識し、その個人を伸ばすための対策が考えられなければならない。そのために事例研究は幼稚園の「社会」の研究法として重要である。個人の興味をのばすためには、当然、それに応じて教材の研究、空間の考慮、時間の制限に対する考慮などがなければならぬ。

## 五、集団生活の約束を認識して守る

集団のルールを認識し、集団の一員として行動することは、幼稚

園の後期において問題としてよいことである。もちろん、安全規律のために最低守ってほしいことは、先生が最初によく言ってお守らせるのであるが、それは必ずしも集団意識にもとづくものではない。幼児後期には、子どもは自分のしたことに対する他の子どもへの反応をみることによって、すなわち、話し合いの中で自分にむけられる批判を意識して行動する。また子ども同志が話しあってお互い同志で考え、調整しながら一つの約束をつくり、それに従って行動する能力ができてくる。このような話しあいによって導き、どのような問題に適用できるかは一つの研究課題である。

以上に掲げた四つの問題領域で「社会」の内容の七〇パーセントが含まれると考えてよい。次に述べる二つのことがらは非常に重要ではあるが、量的には幼児の生活のうちの一部分を占めるにすぎない。

#### 六、社会一般の公衆道徳および道徳を身につける

電車やバスの乗降の際に順番を守る、電車の中でおしわけて席をとらない。道路や公園で紙くずをちらかさないというような公共の場所での道徳は幼児のときから守るように訓練せねばならぬことである。しかしこれは幼児だけの問題ではない。母親や先生をもふくめておとな全体の問題でもある。おとなと子どもとの共同の社会生活の中で、おとなと子どもと共に守るべきことがはつきり認識され、ともに努力する方向に向かうことは望ましい。

#### 七、社会知識・社会科学の基礎を学ぶ

これは小学校の社会科に相当する部分である。幼稚園の時期では社会に関する知識体系を教授しようとすることはほとんど意味がない。幼児は身辺の事象には何ごとでも興味をもつものであるから、身近に経営する乗物、店、行事、事件などについて質問し、疑問をもち、書物を見ることを喜ぶ。それは身近なものに対する興味であって、その点では自然に対する興味とまったく同様である。もしも「社会」で社会知識だけを問題にするなら、自然とあわせて一つの領域とした方がよい。幼児にとっては、社会現象でも自然現象でも、体系的知識を与えることはあまり価値がない。むしろ偶然的な機会に疑問をもち、関心をもち、観察し考える機会をもつことが重要なのであり、偶然的機会をとらえて指導する技術を研究することが課題なのである。

以上は「社会」の内容の概略であるが、最初に述べたように、幼児の生活にふさわしい、幼児が全身で生活できるような幼児教育としてゆくためには、どうしても「社会」の研究が盛にならなければならない。それには個人の事例研究が必要であり、また、クラスも一人の子どもと同様に発達し変化するのであるから、クラス全体の動きの研究とはぜひ必要である。幼児の生活と正面からとりくんで、どの子どももそれぞれ自分の力を發揮して生活できるように考えるところに「社会」の中心的課題がある。

# 幼稚園の「社会」について

斎藤敏夫



## 1 或る日のプログラムを追って

幼稚園の教育内容の中、「社会」の領域ほど複雑なものはない。それは小学校のように細かく分科されていないところに、その複雑性があるのかもしれない。

小学校では、教科の中の社会科があるほか、道徳があり、特別教育活動があり、学校行事などがある。このほか教育思潮の発達にもなつて、教科学習以前の諸問題が論議されていることを見逃してはならない。例えば生活指導の問題がある。生活指導と教科学習、道徳または特別教育活動、学校行事などの関連を、簡単に割り切ってしまうことにも危険がある。また他方には、望ましい学級を形

成することによって、学級の子もたちの学力が向上するばかりではなく、最も望ましい人間形成がなされるといふ、いわゆる「学級づくり」の問題がある。

幼稚園の「社会」は、小学校の社会、道徳、特別教育活動や学校行事などの外、これらの重要な諸問題、つまり最近の小学校教育において、特に喧しく論議されているような内容も含んでいるように思われる。

しかしながら、ここではこれらの点について触れることはさけ、毎日の教育活動の中で、「社会」の領域と考えられる内容のものが、どの程度含まれているかを、具体的に考えてみたい。

次に示すプログラムは、N幼稚園の五歳児の或る組の、一月下旬の或る日のプログラムである。

九・〇〇 登園・健康しらべ。

自由遊びⅡ大積木・絵本・絵画など(ストープに注意)

して遊ぶように)

九・三〇 あいさつ・話し合いⅡその日のできごと 他。

―リズム遊び―

・つみ木遊びⅡ「つみ木」の歌によって表現遊びをする。

○ゆうびんごっこⅡ「クシコスのゆうびん馬車」のリズムに合わせて。

一〇・三〇 うがい・肝油服用(順序よく)

―ごっこ遊び―

○ゆうびんごっこ

・話し合いをする。

・ゆうびん局でみてきたこと。

・どんな係がいるか。

・グループに分れてしたくをする。

・ゆうびん局の人Ⅱポスト・スタンプ・かんばん

・切手など。

・あつめる人とはいたつする人Ⅱかばん・三輪車。

・手紙をかく人Ⅱ二人一組になって絵や字をか

き、交換できるように配慮する。

一一・三〇 ゆうびんごっこをする。

・終わった後の話し合いをする。

一二・三〇 給食のしたくⅡ用便、うがい、手洗い、消毒(ゲル

「ブごくに順序よく」)

給食Ⅱ栄養のお話、レコードをきく。

休息Ⅱ静かに絵本をみる。

お話Ⅱ「ボン子ボン太郎」

婦りのしたく

一・三〇 あいさつ、下園帰宅

(注)

この週の主題による活動は「ゆうびんごっこ」である。

さて、この一日のプログラムを内容的に分析してみると、どの活動の中にも「社会」の経験内容が含まれていることは、明らかであろう。

しかしながら、五歳児の一月下旬といえば、幼稚園教育の終末に近い段階にあるので、それらの内容の大部分は、その学級経営が望ましく行なわれている限り、または特別な事態が生じない限り随時に随所で指導すべきことがらであろう。

例えば、登園直後におきる「自分の持ち物の整理」などは、入園当初の或る期間の中に、懇切な指導を行なっておくべきことであり「友だちと仲よくする態度や能力」なども、その発達段階に応じて、当然に指導が加えられているべき事からであろう。

しかしながら、このデイリープランでは、主題活動として、「ゆうびんごっこ」を取り上げている。この「ゆうびんごっこ」の中で培われるべき要素には、どのようなものがあるかを考えてみたい。

(イ) 先ず「ゆうびんごっこ」の本命ともいふべきものは、教育要領の12頁に示されている。人々のために働く身近な人々を知り、親しみや感謝の気持ちをもつことを、郵便配達のはたらきや、郵便局のようすを見ることを通して、得ることであり、さらに「ごっこ遊び」を通して、これを確かなものにするのである。

(ロ) 続いて考えられることは、この時機に達すれば、小グループの中にあって、初歩的な段階にあるとはいえ、リーダーの役割を果たすことができるであろう。またリーダーを中心として、皆で協力することもできるであろう。

さらに、グループの中の小さな問題を、グループの中で解決する力も芽生えてくるであろう。最後に、他と手紙をやりとりしたり、お互いに関連のある仕事をしたりすることによって、グループ間の交流も行なわれるであろう。

(ハ) 物に対しての内容としては、廃品を利用して必要な用具を作ったり、その役目に応じた用具のはたらきをわきまえたり、またはこわれたものを、自分たちで修理したりするはたらきも期待される。また、必要な用具を作製するに当っては、完成にまで努力しなければならぬような場面が出てくる。

(ニ) 最後に、ごっこ遊びを通して、遊びのきまりを確認し、そのルールに従って遊ぶことも、大切な要素の一つとなるであろう。

## 2 幼稚園の「社会」

幼稚園教育要領の中に示されている幼稚園教育の具体目標をみると、2(3頁)として「幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようになる」として、いくつかの経験内容にあたる項目が挙げられている。これを「社会」における教育内容の「望ましい経験」の諸項目と照合すると、その順序とか組合わせとかには、多少の異同があってもほぼ合致するように見受けられる。

このことから「社会」の総括的な具体目標は「幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようにする」とことと考えて、誤りがないように思われる。

そして、ここでいう「身近な集団生活」ということは「適應」という概念の範囲を示しているものである。

すなわち「望ましい経験」の1から5までのことは、多少は家庭的なことがあっても、主として幼稚園内において考えられることであるが、6、7、8は幼稚園・家庭および社会にまで及ぶものである。

また「適應」という概念の内容を、「望ましい経験」内容から眺めると、必ずしも一元的ではなく、何か構造的に考えた方が整理し易いように見受けられる。

例えば、「望ましい経験」の1、2、は質的な差異はあるにしても、その発達段階に応じて「個性の実現」に通ずるものである。そして5、は学級集団の他の子どもたちとの関係を示したものであり、4、は物に対する経験内容である。そして3、は集団生活の中の民主的な基本から出発した技術的なものとしての「きまり、約

束」に属する経験と考えられる。

さて、このように考えてきても、未だに的確な構想団は浮び出してこない。そこで、それぞれの幼児たちの個性的な発達段階を、ふまえながら、適応し得る最初の段階を考えてみたい。この段階における幼児の状態は、安定した情緒を獲得して、いきいきと個性的な活動ができるような状態ではなかるうか。

このような状態は、いうまでもなく保育室や幼稚園の環境設定の上に、細かな配慮が払われており、家庭的な親和感が満たされていることが、一つの条件になるかもしれないが、それ以上に大切なことは、担任教師と子どもとの関係におけるはたらきである。担任教師が、子どもに対する深い愛情と見識の上にたった、子どもを洞察し理解する力と、それにとまなうすぐれた指導技術とが、大きなはたらきをもつものである。そして、このような状態の上になつて、はじめて「学級づくり」といわれる仕事はじまるといってよい。

幼児たちが、いきいきとした個性的な活動ができてこそ、友だち関係が望ましく調整されるきっかけが得られ、物に対する対し方や扱い方が指導され、きまりや規則に対する理解が深まり身につけてくると思われる。

さて、このように「社会」の目標を「身近な集団生活への適応」というように捉え、これをやや分析的に考えてくると、この目標は幼稚園の教育方針に密接な関連をもつものであり、学級経営方針に直結するように考えられる。したがって、すべての活動の場で、す

べての機会をとらえて、適切な指導内容が押さえられていかなければならないことになる。

ただ、ここで付言しておきたいことは、「のぞましい経験」の6と8にわたる内容については、適切な「ごっこ遊び」とか「構成活動」とかを計画したりすることが考えられ、行事などに関しては、その行事の性格や規模の大小によって、適切な扱い方が計画されるべきであろう。なお、このような場合にも、節々で例示したように、1と5の内容を押しえておくことは当然である。

### 3 結 び

N幼稚園では、幼稚園の指導計画を改善するに当って、「幼児の発達の傾向が著しい時機」を検討し、各期の幼児の特性を書き上げてみたところが、最初の段階では、その内容がほとんど「社会」の内容に通ずるものであった。

これは、民主的な社会の一員としての人間形成の場である幼稚園としては、当然のことであるかもしれない。

現行指導要領以前の小学校の社会科が、教科としての社会科の内容以外に民主社会における道徳や、学習以前の生活指導的な内容をさえも包含していた時代があった。

現行の幼稚園の「社会」は、これ以上の内容を含んでいるように思われる。これを明らかにして、よい教育を実施していきたい。

(東京都千代田区立小川幼稚園長)

# 幼児の健康の指導

— 運動的遊びについて —



松 田 岩 男

幼児の健康の指導にあたっては、身体的発達や疾病の状態、運動的な遊びや健康の習慣および健康に関する事柄についての興味や関心などについて、その実態を明らかにするとともに、幼児をとりまく環境の特性を把握して、それらに即して望ましい経験をさせることが必要である。幼児の健康を維持し、増進するためには、いわゆる健康管理が重要であり、また、健康習慣を身につけさせることが必要であるが、さらに、彼らの心身の発達を刺激するために、適切に運動させることが必要であることはいうまでもない。

ところが「健康の指導」といえば、ともすれば健康管理や健康習慣の問題が中心になって、適切に運動させることが忘れられやすいようである。子どもは放っておいても、それぞれ自分の要求に応じて活発に運動しているので、特に運動について指導する必要はな

いなどという考え方がとられやすいわけである。

一方、運動の指導の必要性を強調する人々の中には、それを強調するあまりに、小学校で行なっている運動を、いくらか程度を低くして形式的に指導しようとしている人もあるようである。

幼児の健康指導という立場からいえば、これらはいずれも問題をもっていると思われるのでここでは、健康指導の中で、運動的な遊び（体育的遊び）をどのように指導したらよいかを考えてみることにしよう。

## 一、幼児の運動的な遊び

子どもたちは、走り回ったり、とんだり、ボールを投げたり、物

により登ったりする活発な、全身的な活動が好きである。これらの活動を通して、身体の形態や機能が発達し、さまざまな運動技能が身につけられていく。

われわれが、日常生活やスポーツにおいて必要とされる新しい技能を習得する場合を考えると、過去において身につけた技能を動員して、それを新しい運動に適應するように再構成している場合が多いものである。したがって、過去に身につけたものが少なければ、それだけ新しい技能を習得することが困難になる。

この点を考えると、知的な発達や性格形成のために、幼児期の経験が重視されるのと同様に、運動技能の発達のためにもこの期の経験が重要であることがわかるであろう。

運動技能は日常生活やスポーツにおいて必要とされるばかりではない。子どもたちにとっては、彼らの仲間(集団)における位置を決める重要な要因でもあることを忘れてはならない。ある運動ができるかできないか、上手か下手かなどということが、子どもたちにとっては、その社会的な位置を決める大切なきめてになったり、遊び友だちの仲間にいれてもらえらるかどうかのきめてになったりするのである。ある運動ができないために、仲間外れになって、ぼんやりと友だちの遊んでいるのを眺めている子どもがあるが、彼らは、そのことのために、多くの社会的経験をもつ機会を失い、行動

も消極的になりがちである。

運動的な遊びの中には、多くの社会的経験の場が含まれている。運動的な遊びには、運動そのものの行ない方と同時に、仲間とどのように遊んだらよいかという「遊び方」を身につける機会が多く含まれている。すなわち、運動的な遊びは「友だちと仲よく遊ぶ」とか「相手のことを考えて、みんなで楽しく遊ぶ」ことなどが要求されている。したがって「他の子どもの邪魔をする子ども」「自分勝手に振舞う子ども」「友だちのできない子ども」などを、運動的な遊びを通して、正しく指導し、社会化を促すように指導することが可能である。

また、「遊び方」の中には、安全に遊ぶ方法や施設・用具を大切に扱うことも含まなければならない。従来、この面の指導においては、その場あたりに、「禁止的」「命令的」なことばで指導され、必要以上に子どもたちの活動が抑制される傾向があるように思われる。幼児期は、いわゆる「しつけ」の時代であるともいわれているが、その中で、自主的な態度の「めばえ」を育てることが必要であり、いたずらに、禁止的、抑制的な指導をしても、かえって指導の効果はあがらない。むしろ、安全に遊ぶ方法を指導し、一方で十分に活動の欲求を満足させるようにしながら、危険を招くような行動を禁止することを考えていかなければならない。すなわち、喜んで



積極的に運動に参加し、仲よく、しかも安全に運動できるように指導することが望ましいのである。子どもたちの生活における他の面では、自主的な態度の「めばえ」を育てることに多くのくふうがなされているが、運動の面になると、とくなくおざりにされやすいのが現状であるといってもよいであろう。

このように幼児の運動的な遊びは、単なる運動ではない。子どもたちの身体的、知的、情緒的、社会的な活動が融合したものである。したがって、その指導は、単に、身体的発達に対する刺激としてでなく、知的、情緒的、社会的な立場からもなされなければならない。

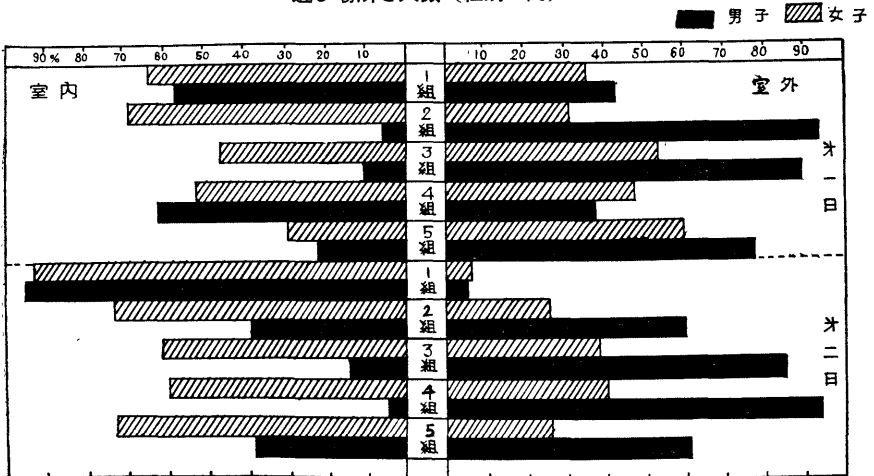
## 二、運動的な遊びの問題点

幼児の運動的な遊びを指導する場合に、どんなところに問題があるであろうか。私たちが東京都内のN幼稚園で調査した結果を手がかりにしてその問題点を拾ってみよう。

まず、幼児の自由遊びの中で、運動的な遊びがどのように行なわれているかを、遊びの種類、人数、場所などの点から調べた結果を要約すれば次の通りである。

○下の図にみられるように、一般に女子は室内遊びが多く、男子

遊び場所と人数（組別の％）



は室外遊びが多い。

○しかし、室外においても施設や狭い場所にかたまり、広場を活用する者は少ない。

○室外の遊びはほとんど運動的な遊びであり、その種類はかなりの多い。

○男女はほとんど一しょに遊ばない。

○遊びは刻々に変化し、五分以内でも移動がかなり激しい。

○人数は種目によって違うが、三〜六人が多く、個人が自由に参加しうるものは一〇人ぐらいになっている。

○しかし遊びに入れない子どもが少数ながらみられる。

すなわち、幼児は運動的な遊びに強い関心を持ち、自由遊びの中で重要な位置を占めているが、その遊びには創意が乏しく、広場の活用が少なく、男女が分離し、女子は比較的静的な遊びが多く、また、遊べない子どもがいることがわかる。

これは一つの幼稚園について調査した結果であるが、多くの幼稚園や保育所においても共通に見られるものが多いと推定され、ここに見られる多くの事柄に指導の手がさしのべられる必要があると思われる。

また、ボールやその他の遊具を与え、四人〜八人で自由に遊ばせて観察した結果では、次のような問題がみられた。

△運動技能について▽

○運動技能では個人差が著しく、また、男女では、「まりつき」は女子が優れているが、他の運動技能は男子が一般に優れている。

○ボール遊びでは、四人ぐらいのチームをつくると、ある程度のゲームが可能である。

○技能の優れた子どもがリーダーになる傾向があり、遊びのルールは、リーダーのことばによってきまる。

○技能の低い子どもは、高い子どもに媚びたり、その真似をしたりして、仲間に入ろうとする傾向がある。

△遊び方について▽

○子どもたちは、遊びの既成の形にとらわれる傾向が強く、創意くふうが少ない。たとえば、大きいボールでは「まりつき」をするものなどといった観念ができて上っている。しかし、新しい遊具を与えた場合には、いろいろな遊びをくふうし、くふうすることにも強い関心が持たれる。

○一人のリーダーによって遊びが支配される傾向があり、不満があっても受け入れられないし、リーダーの力が強いために不満も訴えられないようにみうけられる場面が多い。したがって、よいリーダーの場合には遊びはうまく進展するが、逆の場合に

は、遊具が一部の者の専有になり、他の者は傍観者の位置におかれがちである。男女混合の場合には、男子が専有すると女子は諦めて遊びに参加しない場合が多い。

○一般に、技能の低い者に対する思いやりが乏しく、とくに男子にこの傾向が強い。

すなわち、運動技能では個人差が大きく、しかも、それが人間関係にさまざまな影響を与え、この面でも多くの問題を持っている。また、子どもは、遊びの中で創意くふうするが、既成の遊びの形にとられる傾向も強い。これは経験が乏しいためでもあるが、彼らの活発な創意を生かすためには、自由に考えさせるような場を、遊びの中で与える必要があることも示している。

### 三、運動的遊びの指導

以上において、幼児の運動的な遊びの指導では、運動そのものを行ない方とともに、『遊び方』を指導することが必要であり、社会性のめばえを育てることと関連して指導することが望ましいことを強調してきた。その指導は、形式的にならないように、子どもの自由遊びを基盤にし、そこに指導の手を加える方法をとるのがよいと思われるが、そのためには、運動的な遊びを十分に理解しておくこ

とが必要である。

子どもの行なう運動的な遊びには多くの種類があり、それぞれ特徴があるが、その主なものは次のようなものである。

- ① 固定運動遊具を用いる運動
- ② 床やマットを用いる運動
- ③ 平均台や砂場の枠を用いる平均運動
- ④ 走る、とぶ、投げるなどの運動（汽車ごっこ、陣とり、鬼遊びなどを含む）

- ⑤ ボールを用いる運動
- ⑥ 三輪車を用いる運動
- ⑦ なわや積木などを用いる運動
- ⑧ リズム遊び

これらの運動的な遊びは、それぞれ身体や運動能力に与える影響を異にし、そこで経験される社会的経験も相違し、安全に対する配慮も違うので、それぞれの特徴に応じて指導しなければならない。また、いままでの既成の遊びにとられず、子どもたちの生活の中にみられる遊び方や子どものくふうした遊びをとり入れて、興味を深めるようにすることがたいせつであると思われる。

（東京教育大学）

× × ×

# 幼児の運動の指導

私の家は、相模川ぞいの高台にある。晴れた日には、丹沢山塊が指呼の間にあり、大山は私たちをいつも招いている。こんな環境にあるので、次女が五歳一カ月の五月、一家で大山登山をした。若葉のかおりをからだ一ぱいに吸いこみながら、四千段もあるという石段を踏みしめ踏みしめして登った。標高八百メートルの阿夫利神社の(下の社)に辿りついたとき、いちばん疲れていたのが家内であり、チビの春ちゃんも、ニコニコ顔であった。石段の一つひとつの高きは、長身の私にはさほど大きな抵抗にならないが五歳一カ月の春ちゃんの下肢の長さに較らべると、大腿骨の中期に達する。私はそのとき、わが子の能力を改めて見なおすとともに、幼児の活動能力の偉大さに驚嘆した。

「子どもの生活は遊びである」とよく言われるが、子どもたちは確かによく動く。じっとしていることができないのだ。もっとも増骨細胞がムズムズし、活動的な血液が、からだの中を駆け回っているのだから、手足が動きだすのが当然であろう。友だちと活発に遊ぶ



石井宗一

ない子は、身体的に欠陥があるか、精神的に何か障害があるに違いない。子どもが運動を欲するのは基本的な欲求であり、本来の姿である。この溢れる活動力を満足させてやることによって、子どもたちの健全な発達を期待できる。しかも彼らは、たくましい力を内在させている。おとなのわれわれは、遊びに没頭した幼い頃の楽しい思い出を、かずかずもっているが、身体活動の思い出は、筋肉の感覚として残っていない。疲労と休息のバランスがとれ、元気になるのと精一ぱいあばれまわる。苦痛や努力が伴われない、情緒と身体活動とがうまく統合され、自然のうちに処理されているからであろう。

従来、幼稚園の教育は、積極的な意義が認められないで、本格的なもの小学校から始まると考えられる傾向があった。学校教育法の一条が示すとおり、幼稚園は学校系統の中に、はっきりと位置づ

けられている。「健康・安全な生活のために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること」を主軸にし、幼児の運動のしかたを指導しなければならない。

## 一、遊び場と運動

ブランコやシーソーがおびなりにならべられた施設より、土手があり、いくつかの大きな石があった方が、幼児によろこばれる遊び場になることがある。コベンハーゲンの子どもの遊び場は小山があり、トンネルが掘られ、子どもが登り易い枯木をあしらってあるだけで、どこにもある固定施設より人気があるという。大きな石を庭園のそのように置いた広場で、鬼ごっこや馬のりをして遊び、疲れるとその石に腰をかけ、歌を歌い、子どもなりの夢を語り、思いでにふけり、次の遊びの相談をする。ベルギーのリージュには、綜合運動場があり、若者たちはスポーツを楽しみ、幼児たちは、母親の手を離れて存分に遊ぶ。また、この主任と近くの幼・小・中学校との連絡がよくとれていて、先生が子どもたちを連れてくると、主任と先生は分担して、いろいろおもしろい遊びを指導してくれる。主任の手帳には「○月○日○時、幼稚園○人」と予約がぎっしりつまっていて、市民の広場としての機能を發揮する。

チューリッヒでは、以前巡査の訓練所であったのを、子どもの「交通運動場」に変え、コンクリートのトンネル、十字路には本物の交通標示機がある。子どもたちは、交通巡査になり、交通あそび

に大はしゃぎであるという。交通事故で年間一万二千人も死者を出しているのに、自動車学校はふえる一方であるが、子どものこうした施設は、あまり聞かない。

子どもの活動力を培う遊び場はありきたりの施設でなく、子どもの気持にびったりした、しかもユーモラスに富んだ新しい構想が欲しい。団地の遊び場などに、こうした動きが見えるのは喜ばしいことである。

## 二、ブランコと低鉄棒

おとなが考えるブランコの遊び方は、いくつもない。せいぜい立つか座るか、二本組ぐらいであるが、幼児の遊び方を入念に観察するとびっくりする程、その数が多い。横ふり前後ふり、ねじり回しなどを、立ったり座ったり、腹や背、片足両足、足を離すなど二十種類以上になる。(お茶の水幼、村田氏)

ブランコの支柱の上に大きな分度器をとりつけ、十往復にどのくらい振れが大きくなるかを調べると、四歳児は、男女とも最初の二十度より、ふれが小さくなっていくのに反し、五・六歳児になると、回数を重ねるにしたがい大きなふれになり、六歳児では男児が三四〜三五度ぐらい、女児は四六〜四九度も前後にふれる。(教大、松田氏)

低鉄棒(六〇〜九〇cmがよい)を自由に使わせ、どのくらいできるかを調べたところ、四歳児と六歳児とは、かなりの差がある

し、個人差もまた激しい。腕立てとび上り、足かけふり、うしろおり、足ぬき回りは、小学校一年の教材である。六歳児では、殆んど全部の子が腕立てとび上りはでき、半数が足ぬき回りができる。四歳児は、腕立てとび上りが約半数、足ぬき回りは一〇%内外となる。しかし、小学校の四年生ではじめて指導する腕立て後回りや、足かけ後回りのできる子が六歳児には何人かがいるし、なかには、背すり逆上りのできる子もいる。今こころみに、身体能力の一部を示す鉄棒運動と、算数の段階を較べると、身体活動の特性がよくわかる。すなわち、小学校の四年生では、数と計算、量と測定、数量関係、および図形を指導する。数量関係Ⅱ割合（AとBについて、Aの大きさを2とみるとき、Bの大きさが3とみられるという考え方や、また、そのとき、AはBの $\frac{2}{3}$ であり、BはAの $\frac{3}{2}$ であることなど）は、最もわかりにくい領域とされている。幼児に分数の理解は無理である。ところが低鉄棒の運動では、四年生の段階を何人かの子どもが、遊びのうちにのり越えていく。個人の能力と経験の有無が、それを決定づけている。

#### △その指導▽

ブランコと低鉄棒を手がかりに、幼児の運動技能の実際にふれてきた。子どもたちがおもしろく遊ぶのには、それを使って運動ができることが大事である。それと同時に、ケガをしないこと、仲よく遊べることも必要である。ケガを防ぐのには、管理と指導との徹底の如何にある。しかし、数多い園児と限られた遊具、規かくや構造

上の不備、教師の不足や指導内容や指導技術の低さなどが原因となつて、思うようにならないのが現状である。幼児たちは、自分や友だちの安全に役立つ、いろいろな事がらを理解しないで、勝手にやり教師や親をハラハラさせている。アメリカのハイニンリッヒという人は、一人の重傷者のかけには、二十九人の軽傷者がおり、そのまた背後には三〇〇人のヒヤリ！ がいるといっている。だから、それをじっとして見のがすわけにはいかない。子どもたちは、子どもたちなりに運動の方法や遊びかたを理解させ、安全に、しかも仲よく使えるように指導しなければならぬ。それには、幼児の運動を見つめ、運動の要領や、声高にしゃべっている「ことば」を分析して、それに即した指導をすればよい。

#### 例：ブランコ

○調子をととのえ、ゆっくりとふりだす。  
○友だちがのっているブランコに近づかない。

○「二〇かぞえたらかわるのよ」

×友だちがのっているのを急にとめる。

×「春子さん、二人のりしようよ」

幼児の頃は、自己中心的な行動が多くを占めている。その上「どのようになればケガをするのか」ということがわかっていないし、遊びそのものが活発なので、危険率は倍加する。また、空間的知覚がじゅうぶんでないので、ブランコの前や側面に低い柵を作るなど、施設のくふうをする。

### 三、おにごっこ、なわとび

日常的な遊びとして、おにごっこやなわとびがある。これらの遊びを仲よくおもしろくさせるのには、人数を少なくし、運動の機会を多くしてやることである。彼らは、友だちの逃げるのを見ているより、自分で精一杯追いかけたのである。それをがまんさせておくから、いたずらやケンカをはじめめる。五〜六人の集団にし、小範囲で行なわせる。幼児たちが日常自然のかたちで行なう鬼ごっこは、せいぜい数人である。そして、一種目を長く続けるのでなく興にのって、つきつきと変えていく。したがって、同時に同一種目をさせるばかりでなく、グループごとに自分たちで決めさせ、場所を協させて行なわせる。自分たちの鬼ごっこに飽きたら、隣のグループのを真似てする。このようにして、遊び方や自分勝手になりやすい行動を望ましい方向にかえてやる。

なわとびも多人数より、小人数の方が実際的である。長なわとびをするときは、二人が持ち三〜四人がとぶ。それ以上になると意地悪をしたり、待つ時間が長くなって跳ぼうとする意欲がうすれ、いつの間にかやめてしまう。この場合も、大なみ小なみばかりでなく、グループごとに、好きな「なわとび歌」に合わせてとばせる。四歳児は無理だろうが、六歳児になれば、見よう見まねで結構できるものだ。短なわとびは二〜三人で一組になって、片足を前にし、またぎ越すようにしたとび方からはじめる。場合によっては、ひとつ・

ひとつ区切るとばせてもよい。二〜三人の組になっているので、友だちに教えてやることもある。また、友だちが見ていくれるので、ひとりではできないが、一生懸命にとぼうとするようになるだろう。

幼児の運動の指導は、自然の遊びの中に問題を見つけ、それを保育の中にすいあげ、再び遊びに返してやる。健康で安全な生活のための習慣は、特別な場面で、特別な方法でするのでなく、ごくあたりまえの活動の中で、いつも変ることのない教師の指導があってはじめて可能である。

### 四、日課の中での処理

朝の自由時間や、昼食後のひととき、幼児たちは、狭い庭を走りまわり、固定施設に珠数つなぎになって遊び戯れる。しかし、「お勉強をさせてください」という母親たちの切なる願いに、愛すべき幼児たちは、小さな椅子と机に、がんばりがためにされがちである。すくなくとも午前中二回は、遊びや運動の時間をつくり、六歳児は六歳児だけで存分に身体活動をさせる。ふり注ぐ陽光のもとで、あるいは木蔭で、せめて幼児の頃だけでも、小鳥のように、自然にさせてやりたい。近くに適当な丘や広場があるならば、園外保育の時間を多くし、疲れたら歌を歌い、携帯したトランジスタラジオで、物語りや、名曲を聞かせてやりたい。

# 幼稚園の健康保育

## について



平井信義

この一〇年をふりかえって、幼稚園での健康教育や健康管理がどのように伸展したかを考えてみますと、卒直にいつて、あまりふるわなかつたと言えるのではないのでしょうか。もちろん、この面で非常に努力されてきた幼稚園もあります。けれども、多くの幼稚園ではかなりなおおざりにされている分野です。また、研究会には決して健康保育の部会が立てられません。しかし、二、三の方々の熱心なご発言はみられても、多くの方々のお顔には、なかなかついていけないという表情が見受けられるのです。

そこで、何故そのようにふるわなかつたか、今後にどのようなようにしたらよいかを考えてみたいと思います。

(1) 健康保育は何故おろそかにされているのだろうか

ふた言目には、子どもの健康は大切だと言われ、健康を守るために努力しなければならぬと叫ばれながら、目に見えた伸展がなかつたのは、どのような理由からでしょうか。

(4) 衛生に関する知識の不足や理解の低さ

これは、我が国一般について言えることですけれども、特に保育者に対してそれを言いたいのです。

もちろん、責任の多くが、これまでの医師の在り方にあると思います。簡単に言えば医師がその特権を振り回して、一般の衛生知識の向上に努力しなかつたのです。ですから、少しでも医学的なこととなると、医者まかせ——という気持が根強く植えられてしまいました。病気の診断とか処方については専門家の力をかりなければなりません、そうした病気から自己を守る方法とか、他人に感染さ



せないための努力——すなわち公衆衛生について、少しも啓蒙的役割を果たしてこなかったのです。本当は、病気にかけないためにいろいろな医学的知識を教え、その方法を身につけさせるということ、すなわち予防医学が大切であるのに、この方面は長い間ないがしろにされてきたのです。最近でこそ、この方面の努力が活発になったとはいえ、現在のおとなの方々には、それが及んでいないのです。

(四) 保育科のカリキュラムの欠陥 こうしたことが、実は、保育科のカリキュラムにもよく現れています。健康保育のためには極く僅かの時間しか当てられていません。しかもそこに招かれる医師は、公衆衛生や予防医学よりも、病気についての話をして時間を埋めているというのが、現状ではないでしょうか。幼稚園の実態をさえ知らない医師も少なくないのです。これでは、園の衛生施設を改良したり、予防処置に注意をゆきわたらせるような保育者を作ることは、不可能に近いことと思います。ですから、もっともって保育者によって作られてもよい文化財、たとえば衛生のための紙芝居やお話などが、一向に生れてこないのです。その工夫をする気持にも乏しい現状ではないでしょうか。

(五) 園医の制度もおおざなり 園医といっても多くは名前ばかりで、年に一回の身体検査のときに聴診器を当てるということではないでしょうか。これでは、およそ園医の性格から遠ざかっていきます。園医というのは、健康管理のために必要な存在です。その建議

によって、衛生上の設備がじゅうぶんかどうかを、保育者とともに相談し合う立場が求められています。ところが、そのような園医は、まことに少ないのです。その原因は、園医に出す謝金がまことに少ないということもありますが、公衆衛生や予防医学の知識をもった医師がまことに少なく、したがって関心もうすく熱意に乏しいのです。ですから、保育者も、年に一回の健康診断の際に立ち会うことのほかは、何ら実地に当って教育されることがないので。

このような不遇の中から立ち直って、何とかして公衆衛生・予防医学の知識を持ち、実地に応用して、健康保育の実績をあげることが何より必要です。それを通じて子どもたちにもその家庭にも、健康を守ることの意識を高めたいのです。それが実を結ぶはずの次の世代に期待を持ちたいのです。

実は、健康保育の実があらがないのは、その効果が直ちに現れないことにも一つの原因があります。他の領域の保育ですと、その効果がかなり早く眼に見えてきます。ところが、衛生環境をととのえたり、健康保育に熱心になっても、直ちに弱い子どもを丈夫にしたり、或いは痩せている子どもを太らせたりすることはできないのです。ですから、非常に長い期間をじっと見守っていなければならぬのです。これでは、短慮の保育者が興味を示さないのも無理もない一面を持っていると思います。しかし、それでよいのでしょうか。

殊に、現在園長である方々が、健康保育に熱心でないことが致命的であり得ます。熱意のない園長は、以上に申し述べたような原因をすべて集約して持っているのではないかと思うことさえあるのです。そのために、保育者の中で熱意をもっている方々が、どうにもならず苦しんでいる姿を、ときどき見受けることがあります。この点での隘路を、どのように切り開いたらよいでしょうか。

## (2) 子どもの衛生的習慣がなかなか身につかないのは何故だろうか

衛生上の習慣、たとえば手洗いにせよがいかにせよ、立小便をやることにせよ、それらがなかなか実行されないのはどういうわけでしょうか。きつく言えば、その時は実行しても、なかなか習慣にならないのです。

(1) 家庭におけるしつけの不備 幼稚園において、いかに熱心にしつけをしても、家庭において協力的な態度がないと、なかなか習慣とはなりにくいものです。家庭におけるそうした不備は、親が無関心であることもあり、或いは衛生上の設備をするためのお金がないという場合もあります。テレビなどはいち早く買うのに、台所とか便所とかは、一向に積りまま——という偏った生活文化の在り方が、大きい問題だと思います。とにかく、家庭の協力をいかに得るかということ、家庭教育をいかにするかということが、幼稚園の大きな営みとなります。時折、家庭教育にまで手を出すべきで

ないという説をききますが、それは幼児の精神的発達を知らない方の言い分です。幼児は、非常によく周囲からの影響を受ける存在です。しかも、両親からの影響は大きいものです。両親の生活態度やものの考え方が変らなくては、子どもはよく伸びていきません。いろいろな点で歪みができてしまいます。そこで、家庭教育をすすめるために、両親教育をさかんにしていただきたいのです。その中で、衛生的習慣の形成を期待し、更には生活文化の正しい考え方に ついて、考えてもらうようにしてはどうでしょうか。それにつけても、PTAが幼稚園の世話をやくという外面的活動でなく、いっしょに勉強し合うという内容的な活動をするよう期待したいのです。

(2) 保育者に欠如しているしつけの重点 しつけを、カリキュラムに従って満遍なく行なうというのは、迫力がありません。何が重要か、それについて根を下ろして考えることが、しつけを迫力のあるものにすると思います。例えば、幼児期または三〜五歳の年齢における、三大死亡原因について論ぜよ——という問題を出したら、何とお答えになるでしょうか。まず、子どもを生命の危険から守らなければなりませんし、その態勢をきちんと整えておく必要があります。その第一が不慮の事故であるならば、事故の原因にたいする問題をよく考えてみる必要もあるのです。園内の怪我也それに関係してくるかもしれません。怪我をしやすい場所はないか。古い考え方ですと、「そうした場所では注意して遊ぶのですよ」という

訓戒を与える方式が生じますが、幼児のしつけに果してそれでよいか。その他の方法を用いるとしたら、どのようにするか。また、怪我の多い子どもはないか、その原因は何か——などなど、たくさん問題があります。そのほか、腸炎や赤痢などで死亡する子どもが、他の文明国に見られないほど多いとしたら、園としてどのような対策を立てたらよいか。殊に、おなかの病気を予防する策として、一つには手洗いの励行などが考えられますし、どのよう洗手を洗うことが有効な方法かを考えてみなくてはならないでしょう。その他、買い喰い・遊び喰いの防止にどうしたらよいか、これは家庭との協力がどうしても必要となる面でしょう。また、各種の伝染病について、その予防の対策を根深く考えていくことのできる保育者であってほしい。そうした熱意が欲しいのです。

(4) しつけの上での混乱 保育者が配慮すべき衛生上の問題と、子どもにしつけるべき事柄とを、しばしば混同していることを指摘したかったのです。これは、前の指導要録にも見られることです。そのほかのカリキュラムと呼ばれているものを見ますと、ずい分高次のことを子どもに要求していることがあるのに驚きます。幼児期の子どもに、いったい、どれほどの理解力があるのか、殊に衛生のしつけということは、直ちに目に見えた結果のないもの、バイキンなどといっても全く何が何やらわからない、そのようなことを案外見落して、子どもにあれこれ説明したりしつけたりしているので

はないでしょうか。ですから、いつまでたっても、しつけが軌道にのらないというのが現状ではないでしょうか。

(5) 発育についての誤った理解 子どもの身長が少なかったり、体重が少なかったりすると、すぐに「ダメネ」という気持になる保育者が多いのではないのでしょうか。量さえ大きければそれで、「良い」とする考え方は、これまで頑固につづいていました。しかし、果してそれでよいか。チビでも丈夫で活発な子どもがいます。デブでも弱いからだの子どもがいます。いま殊更にチビとかデブということばを用いましたが、実は、一日も早くこうした劣等性を含んでいることばを、捨ててしまいたいからであります。小さくとも大きくとも、その養育に欠陥がなければ、それはその子どもの個性といってもよいのであります。個性を重んずるようなしつけは、この点でも強調されるべきです。しかし、残念ながら、個性についてはまだじゅうぶん研究されていないのですし、幼児の生理的機能についての研究も薄弱です。保育者と研究者とが手を合わせて開拓していかなければならない分野であると思います。

以上のほか、まだまだ考えればたくさん問題が残っています。何から手をつけてよいかと思うほどですが、これから大いに努力し合って健康保育の実を挙げたいと思っています。

××

××

××

# 第十一回 幼稚園教育実際指導研究会

教育内容の研究——「自然」「健康」「社会」を中心として

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

協賛 お茶の水女子大学

教育研究室・児童研究室  
附属小学校・中学校・高等学校

本会も会を重ねること十一回、年ごとの御厚情を深く感謝申し上げます。

現在、幼稚園教育要領の改訂も進行中ですが、本会としてはすでに「言語」「音楽リズム」「絵画製作」を中心とする研究会を終えましたので、本年は、その残りの「自然」「健康」ならびに「社会」を中心のテーマとすることにいたしました。「自然」「健康」については、すでに指導書も出ているので、相当突っこんだ論究が展開されることを期待していますが、「社会」にはまだ指導書もなく、むしろその関係分野に内在する諸問題点を見きわめて、今後の指標にしたい、と思ひます。

また恒例により、本園の、保育全般にわたる実際指導を公開し、同時に、本園の教育課程についての、ささやかな試案をも発表して、御批評をえたいと思ひます。

本年も、多数の皆様の御参会を心からお待ち申しあげていきます。

なお、「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づく特集としました。

日時 昭和三十七年六月一日(金) 二日(土) 三日(日) の三日間

会場 お茶の水女子大学講堂

講師 (健康) お茶の水女子大学教授 平井信義

(自然) お茶の水女子大学助教授 太田次郎

(社会) お茶の水女子大学助教授 津守真

実際指導

会 員  
幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者

会 費  
三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）

申込期限  
五月二十五日まではがきでお申し込み下さい。

申込場所  
東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会

宿 泊  
宿泊ご希望の方は五月二十日までにお申し込み下さい。二食付七〇〇円（別にサービス料一割）ぐらいにてお世話いたします。

お茶の水女子大学教授  
附 属 幼 稚 園 長  
坂 元 彦 太 郎

お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

日 程 表

日	時	6月1日 (金)		6月2日 (土)		6月3日 (日)	
		受付 開会の あいさつ	実際指導ならびに 研究発表	研究発表	実際指導ならびに 講演	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して
	9.00						
	9.30						
	10.00						
	11.00						
	12.00	昼食	昼食	昼食	昼食	閉会の あいさつ	閉会の あいさつ
	13.00	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して	協 議 指 導 実 際 指 導 に 関 して		
	14.00	シンポジウム 「自然」に関して	シンポジウム 「健康」に関して	シンポジウム 「健康」に関して	シンポジウム 「健康」に関して		
	15.00						
	16.00						

〔予告〕当研究会までに「本園の教育課程（仮称）」出版の予定。実費でおわかいたします。

# 幼稚園における「健康」の実際

お茶の水女子大学附属幼稚園

## 三才児の「健康」

守 永 英 子

三才児保育のねらいの一つとして、生活習慣をつけることの大切さが、しばしばあげられる。いうまでもなく、幼児はまだ発達の過程にあって、病気に對する抵抗力も弱く、健康に對する認識も浅いので、おとなの保護をまたねばならない面が多い。しかし一方、望ましい健康の習慣を身につけるに適した時期でもあり、また筋骨や運動機能を発達させるべき大切な時期でもある。

本来「健康」といえば、身体的な面ばかりでなく、精神的な面も含めて考えるべきであろうが、それでは幼児の生活全体にわたってしまうので、ここでは身体的なものを中心と

して、便宜上健康保持の面と増進の面とから考えてみよう。

この時期では健康を保持するためには、おとなの保護・管理を必要とする部分が非常に多い。しかし指導によって、健康の習慣をかなり身につけていくことができる。

三才児の入園当初は、新しい生活環境に入った不安さも手伝って、何かと教師の手を必要とする。教師は一人ひとりに十分心をくばって、子どもを不安定な状態におかないように気をつけなければならない。それにつけても、教師は、幼児の個人的な特徴、この場合、特に身体的な特徴、習慣的な特徴を知っておく必要がある。用便の近い子ども、ころびやすい子ども、鼻血をだしやすい子ども、手のぬげやすい子ども、疲れやすい子どもなど、またひとりで用便の始末ができるかなども前もって知っておくことは指導の助けとなる。

幼児が早く園の生活になじむためには、園

の生活が、今までの家庭生活とかけ離れたものであってはならない。習慣づけも、無理のないように少しずつ始める。先ず必要なのは手洗いと用便と室内靴、庭靴の区別。手洗いは、登園の時、遊んだあと、用便のあと、食事やおやつの前など、必要に応じて教師が声をかけ、言われたら洗おうとする気持を持たせたい。実際の場で、教師が洗ってみせたり、よく洗えない時は手伝ってあげたりして、洗い方にも、次第に関心をむけさせる。用便も、時々誘って失敗のないようにし、いきたくなったら気軽に教師につけるようにさせる。水洗便所の扱い方も実際にしてみせたり、不安なく用をたせるように、最初はついていくことも必要である。室内と庭との靴の区別もすぐにはできないので、くり返し気ながに分らせる。習慣づけは、園だけでなく、家庭にも協力を求めることが効果的である。集団生活になれるにしたがって、習慣づけるものをふやしていく。登園の時や食前食後

にうがいをさせたり、(できればガラガラうが

い、ブクブクうがいの区別もさせる) 二学期になれば食後に歯をみがくことを始める。今まで周囲のおとながしてあげていたことのうちにも、子どもに自分でしようとする気持をもたせたり、子どもが自分でできるようなものもある。例えば、「鼻をかむこと」などは、最初はかもうとする気持をもたせることをねらいとし、実際は手をかさねばならぬが、三学期にもなれば、鼻を片方ずつかむといった方法の指導に変っていく。このように、おとなが世話してきたことを、だんだん子どもが自分でできるようになるといった種類の事がら——つまり、おとなの手から子どもの手へと次第に移行して行くことがら——は、新しく始めることと違って、いつ頃までにどの程度までというような線をきめることがたいへんむずかしいように思われる。清潔、食事、排便、衣服などに関した習慣づけも、このような種類のことが多い。子どもの一般的な発達の程度を念頭におきながら、実際には個々の子どもによって個人差もある中で、具体的な場面で、個人的に注意したり、励ましたり、ほめたりして望ましい方向へと

身につけさせていくことが多い。

習慣づけの中には、季節的な関係から強調したいものもある。例えば、梅雨時は、「傘なしで雨の中ではない」「室内では静かな遊びをする」。暑くなれば、「戸外では帽子をかぶる」「炎天下では長くあそばない」。寒さに向かったら「暖かい日はなるべく日光にあたる」「咳をする時は口を手でおおう」など。

また、病気やけがなどを防ぐためには、この年令では多くおとなの配慮にまたねばならないが、それでも「指やおもちゃをなめない」「道具や設備を危険のないように使う」など、年令相応に気をつけなければならぬ点がある。

このような健康のしつけには、しつける側非常に重要な根気がある。特に入園当初は、組全体に説明してみんなに分らせるというやり方ができにくいので、「具体的な場面で」「ひとりひとりに」「くり返し」指導する他はない。そして、個人的に注意したり、励ましたり、ほめたりしてくり返しているうちに、大部分の子どもが自然に身につけていく。集団生活になれてくれば、組全体で実行するように約束することも有効になってくるし、子どもの

相互の影響が、それを促進させる働きももつてくる。せっかくつけた習慣も、ゆるみかけることがしばしばあるが、このような時も組全体で約束をしながら、根気よくしっかり習慣を身につけさせることが大切である。そして、それがよりよく行なわれるためには、環境をととのえたり、家庭と十分連絡をとることも心しなければならぬ。

健康増進の面では、いろいろな運動や遊びを考えてみよう。筋骨や運動機能を発達させる多くの機会が、この中に渾然と含まれている。運動能力の発達や、興味の持ち方には個人差がある。この時期の子どもには、いろいろな種類の運動を自由に行なう機会を多くもたせて、その自由な活動を通して指導することが大切であると思う。

子どもの自由に遊んでいる姿を眺めてみるとおもしろい。例えば石だんで遊んでいる子どもをみよう。子どもは石段からとびおりるおもしろさを発見し、それをくり返してあそぶ。慣れてくると少し高い段からとびおりる。それが簡単にできると、もっと高い段からとんでみる。今度は、とびおりた時少し安定を失ってころびかける。そこで彼は次に、

少し前にでて（少し要求を下げて）その程度なら自分の能力が十分であることをたしかめる。そうしてくり返すうちに次第に上手になってくる。

すべり台の子どもに目をうつそう。彼は初めはふつうにすべってあそぶが、それがあまりに簡単なことになってしまうと、両手を手すりからはなしてすべったり、寝ながらすべったり、腹ばいになって足から或は頭からすべってみる。また下から逆にのぼってみたりする。彼らは自由な遊びの中で、自分の能力をためしつゝ可能性をひろげていく。

池のふちで遊んでいる子どもをみよう。この池はごく浅く、ふだんは水がないので、子どもたちはよくここであそぶ。今、特に遊んでいるようすでもない二、三人の女の子がいる。よくみると、池のふちのコンクリートの上を、土のところに出ないように気をつけて歩いている。バランスがくずれると、土のところに出てしまい失敗する。子どもの考えたした運動的な遊びの一つであろう。今度は石の上をわたり歩いたり、池をとびこえて向う側に渡ったりしてあそぶ。二、三人が続けて同じ動作をする。何度も続けてくり返す。つ

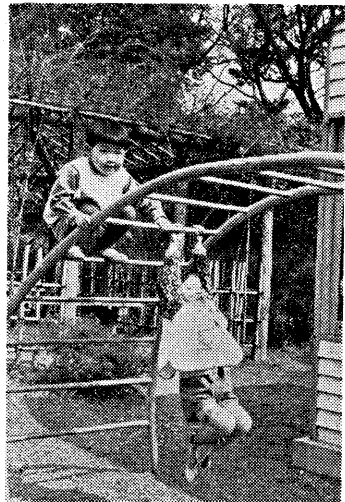


ぶらんこ

まり、まえの遊びにスピードを加えたわけである。

こうした子どもの姿の中に、私は、子どもが本来自分の中に持っている「成長していく力」をみるような気がする。

しかし、このように豊かに展開する「自由な遊びや運動」にも、教師が配慮せねばならない点が多々ある。子どもたちは、まだ危険を避けることが十分にはできないし、運動や



たいこばし

遊びのかたよりや行きづまりもある。子どもたちには、初めに、いろいろな運動設備を紹介することが必要である。遊園地「こっこなど、遊びの中で、ぶらんこ、すべり台などのいろいろな設備を自然に紹介することが望ましいと思う。子どもが自由にためしたり、楽しんで遊んでいる時の干渉は避けねばならないが、子どもが必要とした時にいつでも助けられるように見守っていなければならぬ。教師が新しい遊びや運動に誘ったり、一しょに遊んだりすることは、遊びのおもしろさを経験させたり、自発的な遊びを育てるためにも必要である。おにごっこ、まりなげ、わらべ歌あ



そびなどいろいろな遊びを経験させたいと思  
う。以前教師の助言で発展した遊びが、後  
なって突然子どもの自由な遊びの中に再生し  
発展して、遊びを豊かにしているということ  
をしばしば経験する。

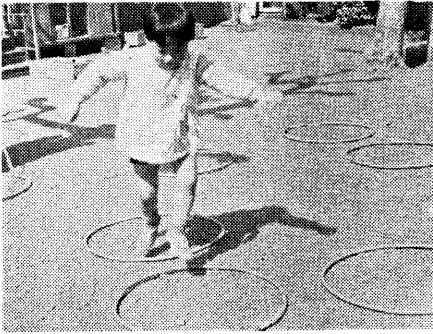
教師が誘って新しい経験をさせることは興  
味を拡げるためにも必要である。以前受け持  
った三才児は殆んど低鉄棒に関心を持たな  
かったが、現在の組では、教師の誘いかけで興味  
をもち、組の半数以上が教師の手をかりて鉄

棒にかかり、ひとりで前回転をしたがるよう  
になった。そのうち二、三人は完全にひとり  
で前回転し自信をつよめて得意がった。

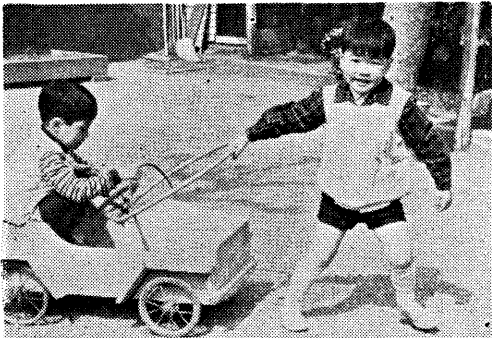
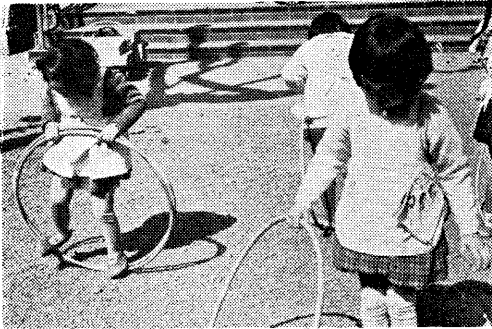
また、年長児の遊びからうける刺激も大き  
い。今年4、5才児の間になわとびが流行  
し、その刺激をうけてやりたがった。三才児  
では、縄をまわして、やっと一度またぐよう  
にとべる程度。年長児のようにリズムカルな  
おもしろさは味わえない。そこで教師が縄を  
まわして、教師と一しょにとぶことで、適当

なむずかしきとおもしろさを味わわせた。教  
師と一しょにとぶことも三才児にはかなりむ  
ずかしく、一しょに跳躍して調子の合ったと  
ころで縄をまわすなどの工夫がいったが、女  
児のほとんどが興味をもち、男児一名と女児  
の半数がとべるようになった。子どもの興味  
のあるところに合わせて、発達に即した扱い  
を工夫することの必要を痛感した。

子どもたちにとって新しい遊具を与えられ  
ることも、運動や遊びを誘発するよい刺激と



藤の輪で遊ぶ





なる。三学期に与えた籐の輪を例にあげてみよう。四才児が籐の輪を並べて、とんで遊んでいるのに興味をもち、いれてもらったのが、輪を使って遊んだ最初の経験であった。彼らは、教師を交えてそれをくり返して遊んだ。ある時、それにもあきたのか各自勝手に輪をもって遊びはじめた。輪をもってころがしてみるもの、両手に一つずつもって、それぞれに足をかけて歩こうとするもの、輪を二つあわせ、輪に両足をのせて輪と一しょ

に横這い歩きしようとするもの、フラフープのようにしようとするもの……そして遂に輪の中に入ってつながり、電車にまで発展した。子どもが教師よりはるかに創造的であったことに敬意を払ったものであった。

もちろん、体育的な効果は、自由な遊びや運動の中だけでなく、リズム遊びや幼児体操などのように、教師の計画の中で考えられることもある。しかし個人差が大きく興味の持続時間も短かく、団体的な行動をとりにくい幼児にあっては、やはり指導の多くの機会を、自由な遊びの中に求めることになるのではないだろうか。

## 四才児

きっかけをとらえた指導例

村田修子

今までに受け持った何組かのことを考えてみると、それぞれいろいろの傾向があった。私が幼稚園の先生になりたての頃に受け持った組については、もっとほかの種類のこ

気をとられていたために、余り判然とはしない。けれども、とてもよい意味で扱い易かった組、そうでなかった組、たいへん印象に残るようなことをする人が多く揃っていたために、とても手がかかった組、などなど、それぞれさまざまであった。

ひとりひとりが集まって組という集団ができるわけだから、今までの経験からしても、本当に幼児はひとりひとりが違うものである、ということをも更ながら痛感する。

そこで現在の組を考えてみると、これもまた私に変わった経験をさせてくれている。

もちろん、その原因と思われるものは幾つもある。その組成が比較的複雑であることや、構成している幼児のそれぞれの性格、などによるものが、そうさせている一番主なものであると思う。参考までに組の構成を具体的にあげてみると、

37名	男児	2年保育	9
	18名	3年保育	9
	女児	2年保育	11
	19名	3年保育	8
		b a (前からひきつづき)	5
		(前は違う組)	3
		b a (前からひきつづき)	4
		(前は違う組)	5

三年保育の b のグループの人達の取り扱いが一番問題が多かった。しかもその人達は俗にいうと、おとなの話し、気分が分る敏感な人が多かった。

また全体的にみても、女兒がいわゆるおとなしく、口かずも少ないし、大声を出す人が割に少なかったし、男児は、元気が無いわけではないが、動きが比較的小さく、遊びのスケールが小さい感じであった。

そのために、中の組の三学期の始め頃までは、扱い易いけれども、その反面余りおもしろい感じの組ではなかった。

そういうわけで、私がいつも気にして考えていたことは、何とかして全体の感じをもっと大型にしたい、ということと、遊びの経験の中を広げたい、ということであった。

動きが小さい、といっても、それは感じの問題で、子どもたちは比較的早い時期からグループを作り、充分にくるくる走りまわり、それ相応に楽しく遊んでいた。遊び方がすらすらとしていて、自分を強く主張することが少なく、みんながうまく協調してしまうことが多い。社会性という方面から考えるとたいへん好ましいわけであるが、この年令ではもう少

し多くの人たちが自分中心で、物のとりあい、遊びかたなどについて我を張るのが本当の姿なのではないかしら、と思われるのに、衝突するのをさけるようによく合わせてしまうことが割に早い時期からできていた。

▲き っ か け▽

例年のように二学期の終り頃からなわとびがはやりだした。今から考えると、どうもこのへんに組のようすが変り出したわけがありそうである。

b グループの女兒の中に、先生が変わったために、なかなか自分を出さずにいたしっকার者の Kちゃんがあった。Kちゃんは最初からなわとびをじょうずにした。他の人は余りできなかった時だけに、自信をもった Kちゃんは、それ以後驚くほど大きな声で挨拶や話をするし、不得手だった書くことも積極的にになり、自分は遊びに入らずじっと人のするのを見ていて、何かのときに世話だけしていたのが、自分からいろいろの遊びを始める中心になって活動するようになってきた。それを引きつけにしたかのようにほかの女兒たちも目がさめたように元気になって、活気ができた。

しおまきの準備



同時に男児のほうも同じような傾向になってきて、今まで単純にただ一団となって走りまわっていた遊びから、ルールを持ったままとまりのある、そしてしかも体力的な遊びがみられるようになってきた。その一つがおすもう遊びである。

おすもう遊び

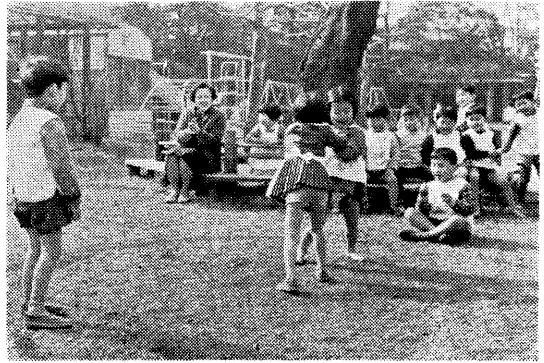
これもおもしろいことから始まった。長い

まった。



間雨が降らないで、どこもかわき切ってしま  
ってほこりになやまされていた或る日、私は  
子どもたちと一しょにフレームの植物に水を  
やっていた。その水が余ったのでそれぞれ  
わいた地面に水をまいたり、水でいろいろの  
形を書いているとき私は大きな円を書いて、  
「こんな大きなまるができたわ」と持ちかけ  
たところ、すぐそばにいた男の子が「土俵み  
たいだ。おすもうをしよう」といい出したの

押しずもう



が始まりである。

みんながおすもうというものを知っていた  
ことや、たまたま呼出しのうまい人がいたた  
めに、気分がもり上り、本もののおすもうの  
ように、塩まき、四肢をふむこと、待った、  
水入り、はては、テレビのスローモーション  
のとりかた、勝った人は賞品を行司からもら  
うところまであらわれ、友達を見るのも、  
自分がとるのも、それぞれがたのしみながら

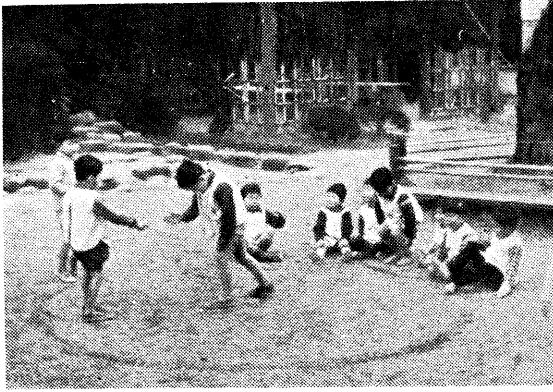
やられた。女の人たちも集まってきてまわり  
でよく応援をした。

私はおすもう遊びをする前に、必ずみんな  
に「これは、押してまるの外へ出すおすもう  
よ。足をかけたりしないおすもうなのよ」と  
言う。そこで女の人達にも「押すおすもうす  
る人ない？」ときそいかけると、そばにいた  
大半の人がする、と言いつ出した。入れてもら  
ってからのようすをみていると、呼び出す人  
はたいていは女の人同志でやらせる。たまに  
男の人とやっても女の人が負けるとはきまっ  
ていなかった。対等に思いきり力を出してや  
るみんなのようすは本当に楽しそうであっ  
た。

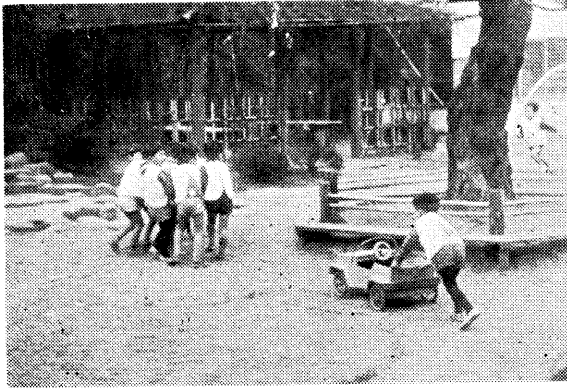
ここまでは余りいつもの年とかわらないこ  
とである。

それが或る日、窓の外をみると、女の人だ  
けのグループで相談ができて何か始まらんと  
しているところである。よくみていると、何  
とおすもうを始めた。呼出しができて呼ばれ  
た人が出てきて押したり押されたりしてい  
る。

私はこのとき驚いたり、うれしかったり、  
複雑な気持ちであった。



すべて少し痛くした人をかかえてベンチへはこぶ  
救急車も出動



考えてみると、おすもうというのと、組んで負けてころがされる、という工合の悪いほうばかり考えがちで、特に女の人のすることではないように思いこんでしまっている。それは押し出す、押し出される、ということは勝っても負けても簡単なことで、その他のいろいろの要素が含まれていないために気がらくなのであろう。私は、今までのその観念を破

つてくれたことがうれしかったし、また過剰と思われるおとなしきについて心配していたことからぬけ出すことができるだろう、という見通しがついたような気がした。何につけても、うまいきっかけをつかむか、のがすか、がいろいろの面で効果をあげるのにたいへん必要であることを今更のように痛感した。同時にまた幼児自身が直接経験

してみたいせつなことも改めて感じた。

もちろん、幼児が試みよう というようになる前に、もう一つ段階がある。それは、何でもやってみよう、と子ども自身が思うようになることである。それには気持ちはほぐれていなければならぬ。やるのが恥ずかしかったり、やって失敗することを恥ずかしいと思ったり、できる人を見て、自分にはできないと思ってしまうと、何にでも気易くとりついていかなくなる。こうならないように心持ちをほぐすのは、やはりおとなの側の問題である。

気分がほぐれた状態になれば、年齢相応のむりのない経験を与えたり、きっかけを作ると、子ども本来の創造力を働らかして、思わぬほうに活動が発展していくことはたびたび経験することである。

このおすもう遊びによって、前にあげたことのほかにもっと思わぬ収穫があった。

その一つは、子ども自身が自分を見出したのではないかと思う。それは、一団となって走り廻っていたときは、Aちゃんが中心になっていた、悪いふんいきではないが、Aちゃ

んにきいてから入れてもらっていたようであ  
ったが、おすもう遊びを始めてから、今まで  
のようにAちゃん中心という気分がかわって  
きたように思われる。みんなの気持ちの中に  
淡いながらも自信ができたように見受けられ  
る。これは私にとっても、ほっとした点で  
ある。

これからも、おすもう遊びがやられていく  
ことと思うし、私も励ましながらうまくやっ  
ていくように持っていくつもりであるが、次  
のようなことを考慮に入れておかなければな  
らないと思っている。

それは、せっかく女の人たちだけでも始め  
られたこの遊びを続けてたびたびやり出すよ  
うにするために、年長組になり組の位置が変  
ったときに、何とかうまく持ちかけて、中の  
組だったときやったのと違う場所でやる経験  
をさせることである。それは、幼児はよく条  
件反射のようにきまった場所にいくと思いつ  
くが、変わったところではなかなか前のよう  
なことが思いつかないことが多いからである。  
次にもう一つ、やはり今までに経験したこと  
がない事柄なので、なわとびについて簡単  
にあげることにする。

## なわとび

これは女児の方が主である。前にあげたよ  
うに、組の空気を変えた一番もとであるよう  
に思われる。やり出したとき、一人とびにつ  
いて次のような評価基準を作って調べてみ  
た。

A リズミカルに続けてよくとべる。  
B 手のまわし方がややリズムミカルでなく、  
全体的にぎこちないが、続けてとべる。  
C 一つまわして縄を地面にとめてはまたぐ  
D 全然やらない、やってみてもできない。

時期	評価				備考
	11月	12月末	1月末	3月中旬	
A	4人	9人	12人	12人	女児のみ
B	5	4	2	4	一月より
C	3	4	4	2	一名退園
D	7	2	0	0	

このように急速に多くの人ができるように  
なることは珍らしい。またやらない人がなく  
なることも珍らしい。

もちろん技術的なことでは、両手と同じよ  
うにまわらない人についてはそのことを分る  
ように言ったり、まわす手と、とぶ足の協応  
動作のむずかしい人は、私がとぶ前に入れて

とばせてあげる機会を多くもって、リズムミ  
カルなどび方を身につけさせるようにすること  
などの指導はしたが、私はそれよりも、次の  
事がよかったのだと思う。

できる人をほめるより、できない人に、そ  
れで当り前、ということを感じさせるような  
言い方、励まし方の方に力を入れ、そして、  
前よりほんの少しでも変わったときはそこをほ  
つきり指摘してやっとなお一層の励みになる  
ようにした。

これはつまり気楽な気持ちでとりついてい  
くことを願ったからである。

このことがまたおもしろい結果をみせてい  
る。それは隣の組の三才児の人たちにも刺激  
を与えていることである。もちろん一人です  
ることはできないが、よくそれらしいことを  
しているのを見かける。また、先生にとばせ  
てもらおうのをたのしみにしているらしい。み  
ているとほほえましくなる。先生が両脚跳を  
しているのに合わせてびょんびょんととぶ。  
それがそろったときに先生が縄をまわす。子  
どもはまわってくる縄を余り意識せず、こわ  
がらずに先生にあわせて同じ調子でとんでい  
れば、なわとびができるわけである。

小さいながらよく考えたものだ」と、近頃  
に感心してしまった。或るていどの刺激  
を与えることの必要なことも再認識した。

## 五才児の健康

### 堀合 文子

幼児の生活には健康が最大の目的である。  
幼児期の幼稚園生活には種々の経験内容が決  
められ、教師によっても計画されている。

「健康」ももちろんその一つであるが、言う  
までもなく幼児期の経験は互に領域が交叉し  
て分離する事はできない。健康はすべての領  
域に働きかけ、幼児の身体的・精神的部面に  
考えられなければならないと思うのである。

○教師の計画の中で「健康」の領域ということ  
「健康」の指導書が私達の指導の手引をし  
てくれる。しかし私共幼児を実際に目の前  
において指導しているものは、知識として健康  
の内容を分類して知っていなければならぬ  
が、幼児の上に表示されてくるのは広い健康



の分野である。特にこれは幼児期だからであ  
ろう。

○戸外でいろいろの遊具を使ったり、幼児  
の創造性を働かせて、幼児の全身を活動さ  
せて遊んでいる。

ぶらんこにのる、すべり台ですべる、ジャ  
ングルよじのぼる、太鼓橋をのぼったりさ  
がったり、鉄棒をまわる、縄のぼり、棒のぼ

りをする、鬼ごっこをする、自動車にのる、  
砂場であそぶ、などなど。

幼児の健康生活はこれだけでよいといつて  
もよい。教師が幼児と共に遊び、指導する事  
が幼児期の健康のすべてだと言っても過言で  
はないだろう。

幼児が自由感を持ち、自発性のみちみちた  
生活をする時こそ、幼児の健康は保持され、  
健康は伸張していくのだと思う。

健康の領域をやらなくてはと、一列に幼児  
を並べてボール投をしたり、幼児用運動具を  
使用させたり、乗りたくない幼児を無理に誘  
導してぶらんこのり方を指導したりするのは  
一見、幼児の健康を指導しているようにみ  
えるが、肢体を動かす事においては平均であ  
ろうが、幼児期においては真の健康教育では  
ないと思う。

自由感の中でのびのびと幼児の自発活動を  
たのしむ生活をしてこそ、幼児の身体的面  
も、精神面も健康に発達し、その幼児こそ健  
康であるので、私共の指導も、個人とその機  
会とを考え、形の中に幼児をはめこまなくと  
も指導する機会はたくさんころがっているの  
で、その時の指導こそ幼児を健康に成長させ



る時である事を特に幼児と生活を共にしている教師の指導はこの点をよく考えて計画し、指導したいと思う。

○もう一つ、幼児が健康であるため幼児の生活をしていくに必要な基本的習慣がある。

排便、手洗、うがい、食事、発育測定などに考えられる幼児のよき習慣。

これは社会の領域から考えられる事と併せて、教師が幼児期に必要な条件をよく知っていてこれを指導しなければならないと思う。前述の健康面を保持するにはこのよき習慣が幼児に必要なものとなる。

■これは、幼児が「躰けられている」という感を持たなく、むしろ知らぬ中にたのしく自然に習慣づけられるこそ教師の指導技術だと思ふ。もちろんこれは幼児の自発的活動でなく、おとなが環境としていろいろ考えなければならぬ場合もあるし、卒先して行動しなければならぬ場合もいろいろある。

幼児は病気になる以上、幼児自身は常

に健康と考えて幼児自身の生活をたのしんでいる。幼児期はおとなが保護しなければならない時期である。幼児が自分から健康保持のために発育測定をしたとか、健康のためだからこの食事をとるなどは珍話であろう。おとながいろいろ指導して後にこのような事を考えるので、それも幼児期にはおとながどの程度保護し、どの程度指導すべきかはよく







考える事が教師のつとめである。

いろいろなきびしく駢けて、よき習慣をつけよき幼児、よき指導と誇るかもしれないが、反面前述の面で大いに不健康となる恐れがあるから、その点幼児期には特に注意しなければならぬことであろう。

○幼児期は保護の時期である。これが管理ともつながる事で、幼児を全身で充分に活動

させる時の管理、よき習慣をつける時の環境

の管理とは幼児を健康に生活させるための教師の大なるつとめであろう。どのように管理を、とははぶくが、幼児が充分に健康であるためには、管理という事を常に考え、口に出さなくとも教師の神経と注意力とを働かせ幼児が安全で健全な健康生活ができるように考えなければならぬ。

### ○五才児の健康

一年乃至二年の幼稚園生活をしてくると、他方面に成長発達する。よき習慣も一応身についてくる。そして幼児の生活は健康の領域から次第に知的な領域の生活へと移行する過程になってくる。しかし健康面は常に考えられており、また、体力も相当についてくるので幼児自身も益々活発な行動で教師の誘導をまたずに自発的、創造的に活躍してくる。また、よき習慣もスムーズに行なわれるようになってくる。

○教師は他の領域の指導でいそがしくなるが機会をとらえては教師も共に遊ぶことは年少の時と同じで機会は少なくなるが大切なことである。五才児の体力は教師が全力を出してもなかなかい場ゆもできてきて、幼児も一段

と張りが出るにちがいない。

○体力ができてくるにしたがい声も大きく行動も活発になってくるし、個々が体力の全部を出して体当りの生活をしていくので、年少の時とちがった意味だけが事故が多くなる傾向がある。もちろんそれは理解がないとか、できないとかのことでなくて体力のあまりがそのような現れになる場合が多い。一つの成長の過程だが教師は管理面で特に注意し正しい軌道にのせてやらねばならない。

○よき習慣も殆んど不自由なく行なわれるようになってくる。しかし、常に教師は観察し、くずれかけたらまた思い出させながら軌道にのせる事はまだまだ指導しなければならぬ。

○五才児になると以上のように或る程度の発達が見られる。それにつれて個人差が甚しくなる。教師はその仲間に入れないもの、また、動的を好まないもの、女子なども共に健康的な遊びができるよう誘導しなければならぬ。その誘導には年少の時とちがった指導技術を考えなければならぬであろう。

○このように五才児は身体方面の健康は幼児期として目にみえて完成の道をたどる。と

同時に精神方面の健康も幼児期としての発達をみる。精神的健康は年少の時より考慮されてはいるがこれもなかなか思うようにゆかず、身体的健康と共に精神的健康も大いに考え教師が幼児の生活を観察しながら指導しなければならぬ事である。もちろん幼児のため、完成された精神的健康ではないが、将来健康なる精神を持つための基盤がここに養われなければならないのだと思う。

就学を前にする五才児には特に健康なる身体と共に健康なる精神を考えておきたいものである。

### ○教師の健康

幼児を指導する教師が健康であることは言うまでもないことである。健康なる身体、健康なる精神を持ち、常に、にこにこと努力をおしまぬ明朗快活な教師でありたい。幼児の「健康」の領域においては幼児期の発達状態、それに必要なさまざまな諸条件をよく理解して心得ておき、幼児が充分に自発活動のためのしめ創造性を働かして活動し、幼児期でなければえられぬ真の意味の「健康」の領域の目的を達するよう努力したいものである。指導ということの中にはもちろん、管理と

いうことが併せ考えられているが、教師が管理を考える時、幼児に要求する以上の知識を持ち自分でも体験、実験して安全度を知る事がより私共の立場では必要であろう。遊具、運動具の正しい使用の仕方をわからずに幼児にやらせるような無責任さは常に反省し、学び研究する謙そんな態度を常に持ちたいものである。

## 予 告

### 幼児教育講習会

期日 昭和37年7月22日—25日

(午前の部・午後の部)

場所 お茶の水女子大学講堂

会員の皆様の御要望により今年は期日を一日繰り下げ二十二日からはじめることになりました。

詳細は次号に掲載いたします。

日本幼稚園協会

### 幼児の教育 第六十一巻第六号

六月号 ◎ 定価六〇円

昭和三十七年五月二十五日印刷

昭和三十七年六月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

フレーベル館

御中

(園名)

(ご住所)

昭和 年 月 日

- ① ぴんくまカップ (定価 七〇円) ……
- ② ぴんくまプレート(小皿) (定価 七〇円) ……
- ③ ぴんくまプレート(大皿) (定価 一一〇円) ……
- ④ ぴんくまランチプレート (定価 二八〇円) ……

右のとおり申し込めます。

枚 枚 枚 個

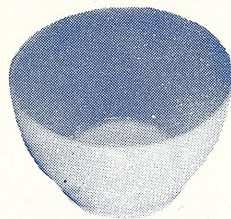
申 込 書

(キリトリせん)

■ フレーベル館の新製品 / PINKMA-WARE

# メラミン製 びんくま 給食用食器

陶器やプラスチックにかわる、あたらしい給食用食器が誕生しました!!



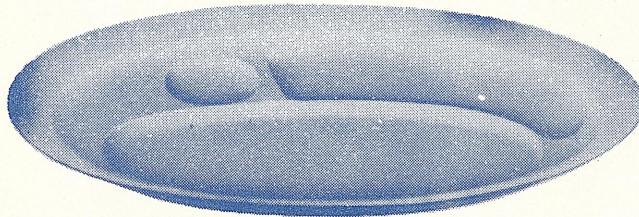
ぴんくまカップ 直径9.2cm×深さ5.1cm



ぴんくまプレート(小皿) 直径12.3cm×深さ1.6cm



ぴんくまプレート(大皿) 直径16cm×深さ2.1cm



ぴんくまランチプレート 直径30cm×21cm 深さ1.9cm

## ■ 特 長 ■

- ① 落したり、ぶつかけたりしても、かたんにはこわれないメラミン製品です。
- ② 耐熱性に富んでおり、しかも半永久的な寿命をもっています。(熱消毒自由)
- ③ 静電気が起きないからゴミが密着しません。
- ④ 軽いので一度にたくさん持ち運べます。
- ⑤ 給食用にピッタリのサイズです。
- ⑥ 色は、食欲をますうすクリーム色です。

## ■ 種類と定価 ■

- |                |      |
|----------------|------|
| ① ぴんくまカップ      | 70円  |
| ② ぴんくまプレート(小皿) | 70円  |
| ③ ぴんくまプレート(大皿) | 110円 |
| ④ ぴんくまランチプレート  | 280円 |

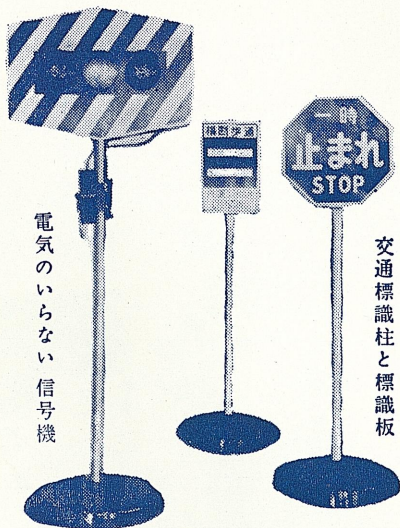


お申し込みは \_\_\_\_\_ 株式会社

フレーベル館

# 幼児に交通安全教育を!!

## 交通安全あそび



電気のいらない信号機

交通標識柱と標識板

信号機(1台) 交通標識(標識柱2本、  
標識板6種) 交通教育指導書(1組)

定価 1セット 17,500円

—— 内 容 ——

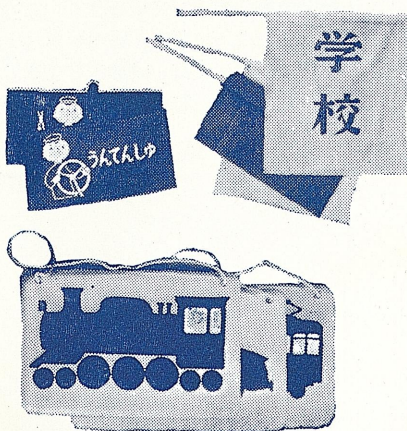
信号機(高さ1.8米) 1台 9,500円  
\*信号機は実物に近い精巧で信号の点滅は電気を使わない新方式です。

交通標識柱(高さ1.2米)2本各2,050円  
交通標識板 6種各600円  
横断歩道・安全地帯・歩行者横断禁止・一時止まれ・踏切あり・学校、幼稚園、保育園あり

\*交通標識柱・標識板ともスチール製で簡単につけ替えができます。

交通教育指導書 1組 300円

## 交通安全あそび 補助セット



幼児の集団遊びをいっそう楽しく発展させるために揃えた補助セットです。

定価 1セット 2,300円

—— 内 容 ——

交通車を示す標識 6種 各275円  
自動車・トラック・バス・オートバイ・電車・汽車

緑のおばさんの旗 1本 100円  
緑のおばさんの腕章 1枚 75円  
赤旗と白旗 各1本 100円  
運転手と車掌の腕章 各1枚 75円  
交通巡査の腕章 1枚 75円  
呼子(笛) 1個 50円

お申し込みは最寄りの代理店・出張所へ

▲ フレーベル館

# キンダーブック

7月号予告

“つくりましょう”



なんでも つくってやろう——たのしい夏休みに、自分で、いろいろなものを作りあげる気持を刺激させようと意図した、愉快的製作ヒント絵本です。

A4判 16頁 付録つき  
50円

東京都千代田区神田小川町 3-1

フレール館

振替口座 東京 19640 番 電話 東京 (291) 7781~5

別冊

## キンダーブック 物語絵本

(季刊)

夏の号

“ぶーふーうーの  
おせんたく”

構成文・飯沢匡  
製作・シバ・プロダクション



別丁ヘアレンツコーナーつき

B5判 20頁 50円